

富士宮市文化財調査報告書第35集

# 大室遺跡

---

富士総合開発観光株式会社宅地造成工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

富士宮市教育委員会

# 大室遺跡

---

富士総合開発観光株式会社宅地造成工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

富士宮市教育委員会

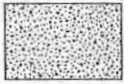
# 例 言

1. 本書は、静岡県富士宮市小泉字大室しずおかけん ふじのみや し こいずみあざおおむろに所在する「大室遺跡」おおむろ いせきの発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、富士総合開発観光株式会社による宅地造成工事に先立ち、静岡県富士宮市小泉1453-1他で実施した。
3. 発掘調査及び整理作業は、富士宮市教育委員会が行った。調査体制は以下のとおりである。

|       |  |     |      |
|-------|--|-----|------|
| 調査主体者 | 富士宮市教育委員会  | 教育長 | 大森 衛 |
| 調査担当者 | 富士宮市教育委員会文化課   | 学芸員 | 渡井英誉 |
|       | 富士宮市教育委員会文化課   | 嘱託員 | 佐野恵里 |
|       | 富士宮市教育委員会文化課   | 嘱託員 | 小野田晶 |
| 調査補助員 | 阿部稔男、勝俣利雄、斉藤之弘、渋谷政夫、堤健一、古郡善明、<br>渡辺敏雄、山崎里恵、渡辺成子、渡辺修子 |     |      |
| 整理作業員 | 佐藤節子、渡辺麻里  |     |      |
4. 調査期間は、発掘調査を平成16年12月13日～平成17年1月14日まで行い、整理作業を平成17年1月21日～4月20日まで行っている。
5. 写真撮影は、佐野、小野田が行った。
7. 本書の編集は、佐野が行った。
8. 本書の執筆は、渡井、佐野、小野田が分担して行い、文責は末尾に示した。
9. 出土資料のうち、石器石材鑑定は、財団法人石の博物館 奇石博物館 北垣俊明氏に依頼した。
10. 本書に関する全ての資料は、富士宮市教育委員会文化課で保管している。
11. 発掘調査から本書作成に至るまで次の方々からご指導、ご協力をいただいた。記して感謝する次第である。(敬称略)  
伊藤一芳、植松章八、野村昭光、株式会社東日

# 凡 例

1. 地形図、遺構実測図中の標高は、全て海拔高度をもって示し、単位はメートル (m) とする。
2. 大室遺跡の調査区は、任意にグリッドを設定した。方位は、日本測地系国土座標第Ⅷ系に基づく国土座標軸国土座標による。
3. 挿図中の縮尺は、挿図ごとにスケールで示している。また、挿図中の以下のトーンは、攪乱を表す。



4. 土層注記に記載した色調は、『新版 標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会事務局) で補って判断している。
5. 挿表中の数値は、すべてセンチメートル (cm) で表している。( ) 内で示す数値は、推定値または残存値である。
6. 本書の図3、図4の遺跡分布図は、平成8年に建設省国土地理院長の承認を得て、富士宮市役所が平成9年に調整した富士宮市都市計画図に加筆して作成している。

# 目次

## 第I章 はじめに

- 1. はじめに ..... 1
- 2. 調査の経緯と経過 ..... 1
- 3. 地理・歴史的環境 ..... 2

## 第II章 調査区と層序

- 1. 調査区の設定 ..... 9
- 2. 層序 ..... 10

## 第III章 発掘調査の成果

- 1. 遺構 ..... 13
- 2. 遺物 ..... 17

## 第IV章 おわりに

- 1. 発見された遺構 ..... 21
- 2. おわりに ..... 23

報告書抄録

# 挿図目次

|                                  |                           |
|----------------------------------|---------------------------|
| 図1 大室遺跡位置図 ..... 1               | 図10 SK 1・2実測図 ..... 15    |
| 図2 遺跡周辺地質略図 ..... 2              | 図11 SK 3実測図 ..... 15      |
| 図3 周辺遺跡分布図① ..... 4              | 図12 SK 3セクション図 ..... 16   |
| 図4 周辺遺跡分布図② ..... 5              | 図13 SD 1出土遺物 ..... 17     |
| 図5 大室遺跡採集土器実測図 ..... 6           | 図14 SK 3出土遺物 ..... 17     |
| 図6 大室古墳墳丘測量図・<br>採集土器実測図 ..... 7 | 図15 遺構外出土遺物① ..... 19     |
| 図7 調査区設定図 ..... 9                | 図16 遺構外出土遺物② ..... 20     |
| 図8 調査区土層図 ..... 11               | 図17 確認調査トレンチ出土遺物 ..... 20 |
| 図9 SD 1・2実測図 ..... 13            | 図18 木ノ行寺遺跡遺構分布図 ..... 22  |

# 挿表目次

|                    |                   |
|--------------------|-------------------|
| 表1 周辺の遺跡一覧 ..... 4 | 表2 遺物観察表 ..... 24 |
|--------------------|-------------------|

# 写真図版

|                                       |                 |
|---------------------------------------|-----------------|
| 図版1 A. 調査区全景／B. SK 1                  | 図版4 A. 遺構外出土遺物① |
| 図版2 A. SK 2／B. SK 3                   | B. 遺構外出土遺物②     |
| 図版3 A. SD 1出土陶磁器／B. 石器<br>C. SK 3出土遺物 |                 |

# 第I章 はじめに

## 1. はじめに

富士宮市の小泉から大岩にかけての地区は、市指定の大室古墳をはじめとして、縄文時代前期の集落が発見されている峯石遺跡や古墳時代前期の有力者の墓である丸ヶ谷戸古墳などがある遺跡の濃密な分布区域であり、古くから遺物が数多く採集されていた。今回調査を実施した大室遺跡は、遺跡分布域の中央部にある遺跡で周囲の三ツ室遺跡や峯石遺跡などと共に広範囲の遺跡群を形成している。

大室遺跡のあるこの地域は、駿河湾最奥部を占める富士川下流域に含まれる富士山西南麓に広がるが、そこは富士山の大沢から続く潤井川左岸及びその支流である弓沢川左岸に当たる(図1)。

今回の発掘調査は大室遺跡に対する初めての本格調査である。

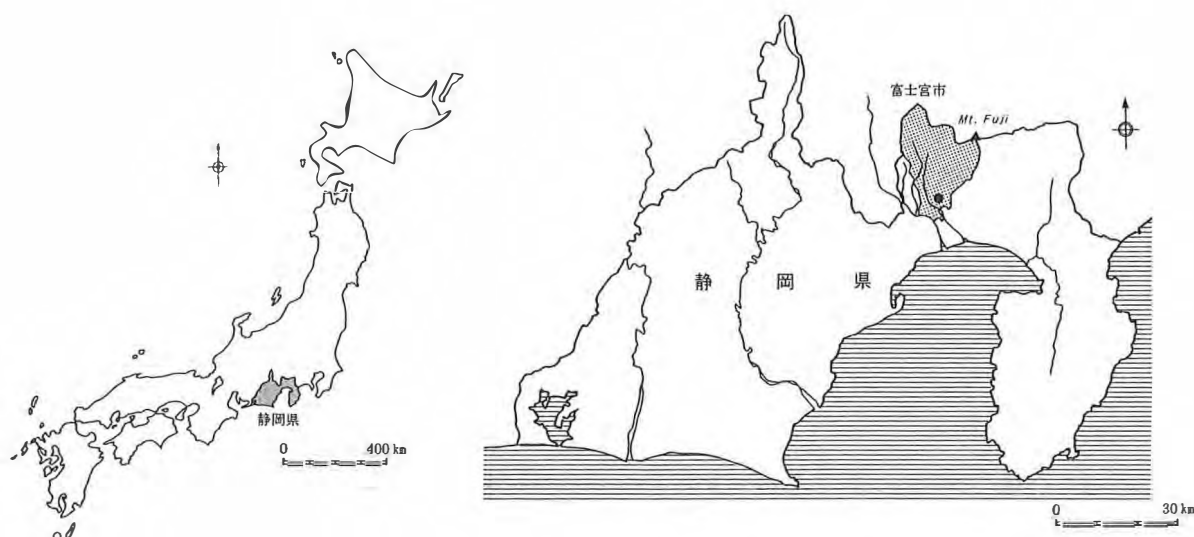


図1 大室遺跡位置図

## 2. 調査の経緯と経過

大室遺跡の分布範囲に含まれる大室古墳から南へ100mほどの地点において住宅地の造成が計画されたのに伴い、2004年1月15日～1月31日まで遺跡確認調査を行った。その結果、縄文時代中期～後期の土器を含む遺物の包含層が確認された。2005年1月以降に実際の造成工事が予定され、工事により遺跡に影響のある箇所について本格的な発掘調査を実施した。発掘調査は、事業対象面積5,657㎡の中で515㎡に対して行っており、2004年12月13日から翌年2005年1月14日まで期間を要した。

調査対象地の現況は石垣や擁壁などにより区画された畑地で、陸稲やイモ類、根菜類、茶などが栽培されていた。調査区は住宅地造成に係わる道路敷設部分とその南側の調整池設置部分との2箇所大きく分かれており、幅6mほどのトレンチ状の区画として設定されている(図7)。

調査は表土及び無遺物層の除去を重機で行う以外は人の手による詳細調査を実施している。層位的に掘り進める中で大沢ラピリ層（Ⅱ層）やクロボク（Ⅲ層）などが残存する部分に関しては、弥生時代以降の遺構確認を同時に行いながら、土坑や溝などの調査を実施している。現況が畑地であるため各地点で残存する層位はそれぞれ異なり、遺構の確認される面も遺物包含層の状況も現在の地形の改変に伴い偏りが顕著であることから、土層の堆積状況に特に注意を払いながら遺物包含層を掘り進めている。

縄文時代の調査は、遺物包含層の調査に並行させて調査区の南端で発見された土坑（SK 3）に対する詳細な調査を行っている。

調査は途中に年末年始が入り、12月29日以降1月4日までの休暇を経て、2005年は1月5日より再開している。包含層調査掘削が済んだ箇所から土層図などの作成に取り掛かり、現地における発掘調査を1月14日に終了しており、17日間の日数を掛けている。

発掘資料の整理作業は、現地調査の終了以後、富士宮市教育委員会文化課埋蔵文化財整理室で行い、本報告の刊行を以って一連の作業を完了している。

### 3. 地理・歴史的環境

大室遺跡は、富士宮市の南西部に広がる富士根地区に位置している遺跡である。この地区は、富士山西南麓の斜面地に当たり、雛壇状にいくつもの丘陵が形成されている。各丘陵は南に向かって緩やかな傾斜を示し、それぞれが河川や枯れ沢などにより開析されることで独立性を持つようになっている。

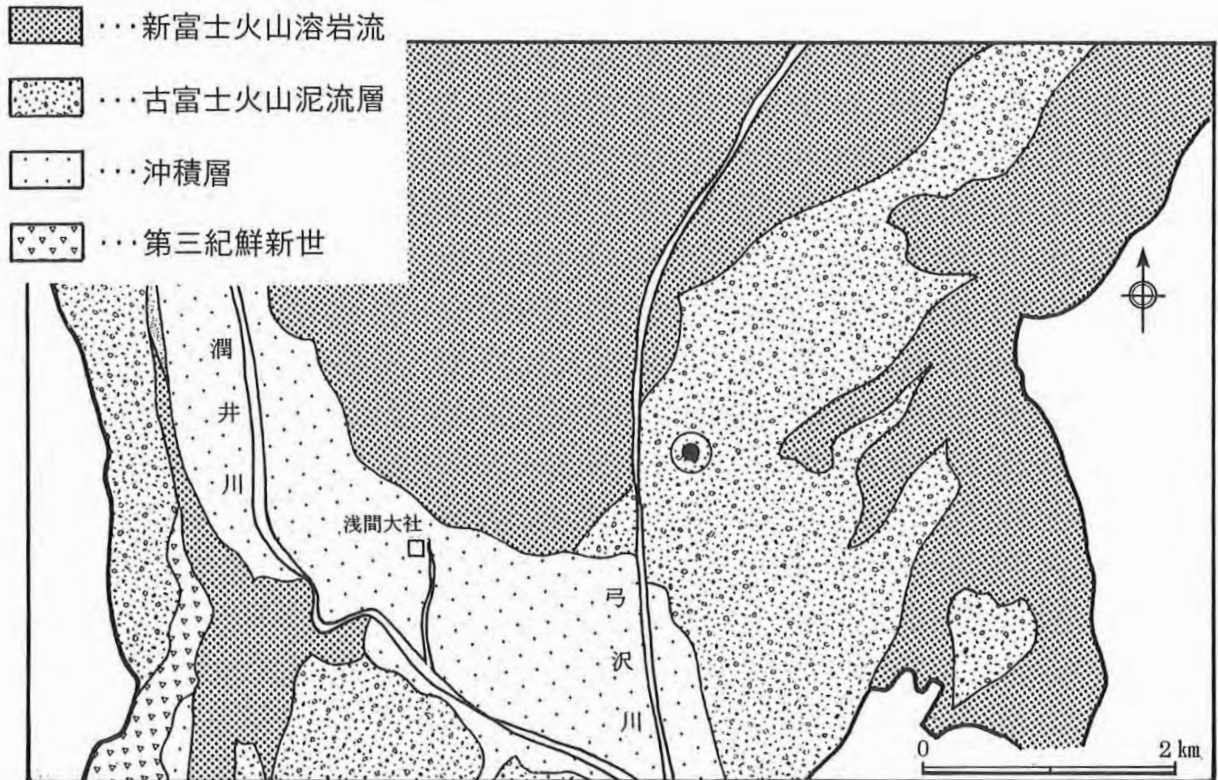


図2 遺跡周辺地質略図

この地区は古富士火山を起源とする古富士火山の集塊質泥流層及びその上に広がる扇状地堆積物をその地形的な基盤としており、ほかの同じ富士山斜面部分と大きく様相を違えている(図2)。このことは、丘陵自体の傾斜が緩やかになるとともに独立した景観を示すようになること、また、富士山の重層構造が作用して形成された湧水地を多く保有することなどから遺跡経営の大きな礎となっている。

富士山西南麓は地形環境の複雑さから偏在する遺跡分布を示している。その要因となるのは、生活用水などを容易に獲得するための自然環境の作用する部分が大きいわけであるもので、新富士火山と呼ばれる最も新しい富士山に覆われて範囲の縁辺部にやや偏在して展開する湧水地の位置や河川の流路などが直接係わるのである。

大室遺跡の周囲では、その東側300mほどを南下する中沢川の流域にその水源となる出水不動尊や神祖の湧水地が点在している。また、遺跡の西側は大沢川が中沢川と同じように南流している。いずれも弓沢川の支流となる小河川であるが、地域の生活基盤を支える点では極めて重要な河川でもある。

これらの河川や湧水地は、それらに直接影響され、そのまま遺跡分布の範囲に反映されるものである(図3)。そのため、前述のように湧水地が多く、潤井川の支流である久遠寺川や慈眼寺沢川などをはじめとして各河川が発達している富士根地区は、大室遺跡(1)や辰野遺跡(3)、時田遺跡(4)、丸ヶ谷戸遺跡(5)、峯石遺跡(6)などをその西側とした遺跡の分布圏を見ることが出来る。それは、この地区の西側を流れる弓沢川をほぼ境界とする領域でもある。この川は地質的な境ともなり、その東側を新富士火山起源の溶岩流に覆われた地域が広がる。地質環境の違いは間接的に遺跡分布の違いともなり、弓沢川以西において新富士溶岩流の及ばない浅間大社遺跡(44)や大宮城跡(45)などの周辺は別にして、遺跡の分布がほとんど見られなくなる。

広範囲に亘る遺跡群を形成する富士根地区において人々の生活の始まりが認められるのは、小泉にある若宮遺跡(30)での集落の登場からである。縄文時代草創期の遺物の発見や縄文時代早期の集落跡が調査されている。この若宮遺跡周辺では、比較的縄文時代早期の遺跡のまとまりが指摘できるようでもある。若宮遺跡に隣接する代官屋敷遺跡(29)でも早期の集落跡が調査され、若宮遺跡の西側にある石敷遺跡(34)では、早期の竪穴住居跡と共に土坑群が発見されている。

このような早期の遺跡範囲から分かるように、縄文時代の遺跡は富士根の遺跡群のほぼ全域において確認されるものであるが、時代ごとに主体となる地点や分布範囲を違えているようである。縄文時代前期では、大室遺跡(1)に隣接する峯石遺跡(6)において竪穴住居址と集石、分布域の北側にある箕輪B遺跡(8)で竪穴住居址がそれぞれ調査され、代官屋敷遺跡(28)で前期後半段階の遺物が発見されている。同様に出水遺跡(16)でもこの時期の遺物が採集されているが、いずれの遺跡もその規模はあまり大きくないようである。

縄文時代中期～後期前半にかけては、遺跡の面的な広がりがはっきりする段階である。遺跡群の南側にある上石敷遺跡(35)や代官屋敷遺跡(28)では、中期前半の竪穴住居址がそれぞれ一軒ずつ発見されている。この段階の遺跡分布はやや偏っており、遺跡群の南側を主体としている。中期の中葉以降遺跡の数は大きく増える。大室遺跡(1)、丸ヶ谷戸遺跡(5)、箕輪A遺跡(7)、箕輪B遺跡(8)、滝沢遺跡(9)、神祖遺跡(12)などが主な遺跡として取り上げることができる。これらは、この遺跡群の北半部を占めるように分布している様子が分かる。標高の高い部分に対する開発の痕として捉えられよう。ただし、それぞれの遺跡の範囲はそれほど大きくなかったことが箕輪A遺跡に対する発掘調査などから判明している。それは、市内野中にある滝戸遺跡





図3 周辺遺跡分布図①

表1 周辺遺跡一覧

| 番号 | 遺跡名     | 種別     | 主な時代     | 標高  | 番号 | 遺跡名    | 種別     | 主な時代     | 標高  |
|----|---------|--------|----------|-----|----|--------|--------|----------|-----|
| 1  | 大室遺跡    | 散布地・古墳 | 縄文・古墳    | 170 | 24 | 金井坂遺跡  | 散布地    | 縄文       | 200 |
| 2  | 大室古墳    | 古墳     | 古墳       | 176 | 25 | 大辻遺跡   | 散布地    | 縄文       | 225 |
| 3  | 辰野遺跡    | 散布地    | 縄文・古墳    | 205 | 26 | 新梨遺跡   | 散布地    | 縄文       | 210 |
| 4  | 時田遺跡    | 散布地    | 縄文・古墳    | 192 | 27 | 杉田西原遺跡 | 散布地    | 縄文・古墳    | 180 |
| 5  | 丸ヶ谷戸遺跡  | 集落・墓 他 | 縄文・弥生・古墳 | 175 | 28 | 代官屋敷遺跡 | 集落     | 縄文・古墳    | 155 |
| 6  | 峯石遺跡    | 集落     | 縄文・奈良    | 182 | 29 | 大宝坊遺跡  | 散布地    | 縄文       | 150 |
| 7  | 箕輪A遺跡   | 集落     | 縄文       | 220 | 30 | 若宮遺跡   | 集落     | 縄文       | 150 |
| 8  | 箕輪B遺跡   | 集落     | 縄文       | 220 | 31 | 中ノ土手遺跡 | 散布地    | 縄文・古墳    | 128 |
| 9  | 滝沢遺跡    | 散布地    | 縄文       | 230 | 32 | 荻間遺跡   | 散布地    | 弥生・古墳・奈良 | 114 |
| 10 | 出水西遺跡   | 散布地    | 古墳       | 185 | 33 | 上宿遺跡   | 散布地    | 縄文・古墳    | 105 |
| 11 | 三ッ室遺跡   | 散布地    | 縄文・古墳    | 155 | 34 | 石敷遺跡   | 集落・墓 他 | 縄文・弥生・奈良 | 110 |
| 12 | 神祖遺跡    | 散布地    | 縄文・弥生・古墳 | 168 | 35 | 上石敷遺跡  | 集落     | 縄文・古墳・奈良 | 120 |
| 13 | 神祖3号墳   | 古墳     | 古墳       | 162 | 36 | 向田遺跡   | 散布地    | 古墳       | 115 |
| 14 | 神祖2号墳   | 古墳     | 古墳       | 164 | 37 | 中沢遺跡   | 散布地    | 古墳・奈良    | 120 |
| 15 | 神祖山ノ神古墳 | 古墳     | 古墳       | 176 | 38 | 田中遺跡   | 散布地    | 弥生       | 110 |
| 16 | 出水遺跡    | 散布地    | 縄文・古墳    | 185 | 39 | 南部谷戸遺跡 | 集落・墓 他 | 弥生・古墳    | 113 |
| 17 | 寺ノ後遺跡   | 散布地    | 縄文       | 170 | 40 | 塚本古墳   | 古墳     | 古墳       | 118 |
| 18 | 寺内遺跡    | 散布地    | 縄文・古墳    | 150 | 41 | 二ノ宮遺跡  | 散布地    | 古墳・奈良    | 142 |
| 19 | 木ノ行寺遺跡  | 集落     | 縄文・古墳・奈良 | 140 | 42 | 城山遺跡   | 散布地    | 中世       | 150 |
| 20 | 寺内山ノ神古墳 | 古墳     | 古墳       | 143 | 43 | 若ノ宮遺跡  | 散布地    | 古墳・中世    | 140 |
| 21 | 小泉中村遺跡  | 散布地    | 縄文・古墳    | 140 | 44 | 浅間大社遺跡 | 神社     | 中世       | 120 |
| 22 | 小泉向原遺跡  | 散布地    | 縄文       | 160 | 45 | 大宮城跡   | 城館     | 中世       | 130 |
| 23 | 出水東遺跡   | 散布地    | 縄文・古墳    | 183 | 46 | 蓮雀町遺跡  | 散布地    | 弥生・古墳    | 130 |

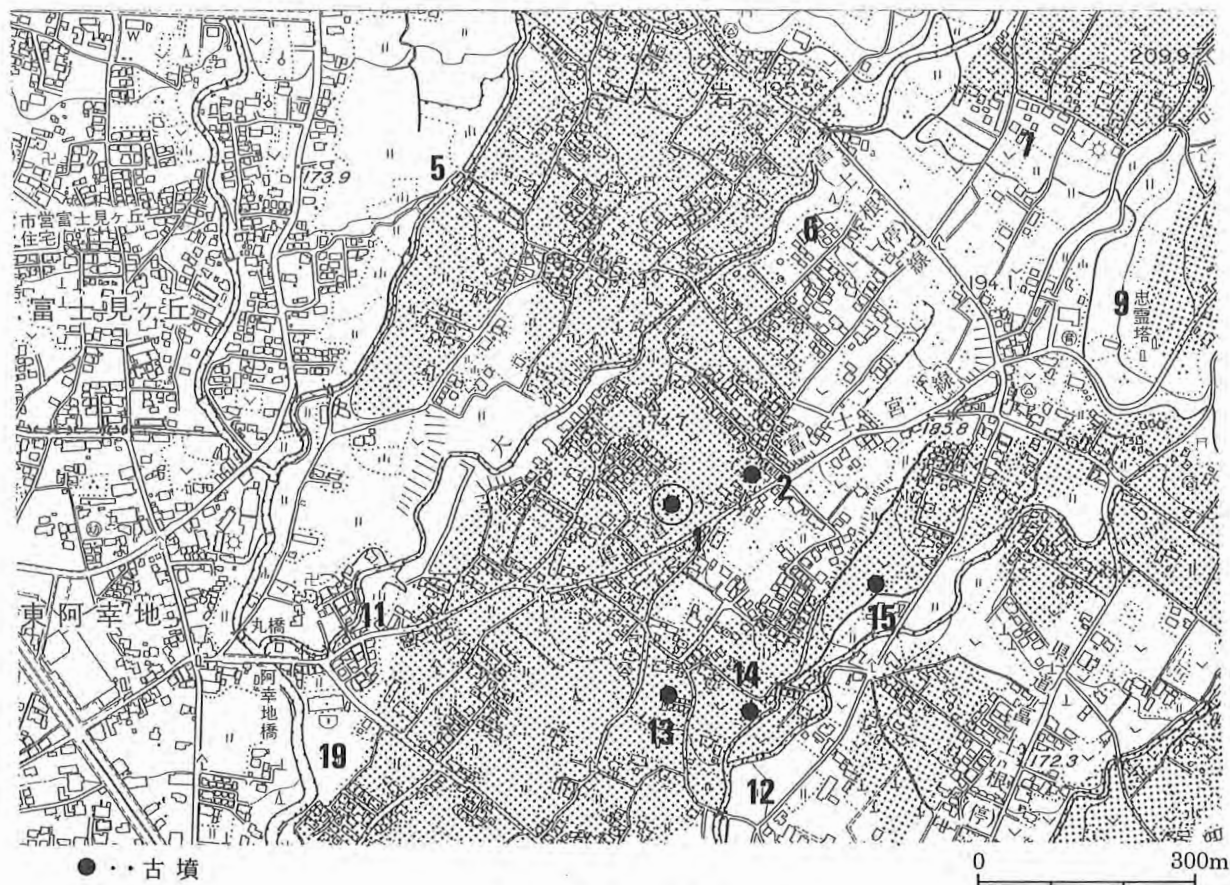


図4 周辺遺跡分布図②

や富士市天間の天間沢遺跡の集落からも指摘されることであり、それぞれの規模は時間的な連続性を加味しても比較的小さいのである。これがこの地域における縄文時代集落のひとつの特徴でもある。これら大半の集落遺跡は、縄文時代後期前半ではほぼ消失し、遺跡数が大きく減少する。辰野遺跡（3）では縄文時代後期後半～晩期の土器、石器などが採集されているもののこの段階の遺跡をこの地区で見ることではできなくなる。

弥生時代になると、市内淀師の渋沢遺跡や安居山の別所遺跡において中期前葉の遺跡経営の痕を窺うことができるが、それは限定された区域だけであり、この富士根地区においては後期になって石敷遺跡（34）が登場することによって、弥生時代の具体的な集落経営の始まりが知られる。石敷遺跡（34）では、弥生時代後期後半の竪穴住居址が7軒発見されている。ただし、弥生時代後期における遺跡分布は、それほど広範囲に及ぶものではなく、この石敷遺跡周辺と黒田の月の輪上遺跡や下ヶ谷戸遺跡、野中の滝戸遺跡から大中里坂下遺跡の区域、滝戸遺跡とは潤井川を挟んで対峙する泉遺跡や羽衣町遺跡など地点として把握されている。その中で、泉遺跡においては弥生時代後期中葉の環濠の一部が発見されており、典型的な環濠集落の様相を示している。

古墳時代前期になると遺跡の分布範囲は大きく広がる。富士根地区の遺跡群では、大室遺跡（1）、峯石遺跡（6）、三ツ室遺跡（11）、神祖遺跡（12）、寺内遺跡（18）、木ノ行寺遺跡（19）、石敷遺跡（34）、上石敷遺跡（35）などが有力な遺跡として取り上げられる。上石敷遺跡（35）では、古墳時代前期前葉の集落が調査されている。そして、さらに注目されるのは大室遺跡と大沢川を挟んで近接する丸ヶ谷戸遺跡（5）において弥生時代終末期の集落と古墳時代前期前葉のこの地域

における有力者の古墳である丸ヶ谷戸古墳が発見されたことであろう。丸ヶ谷戸古墳は全長26.2mを測る前方後方墳である。

このような、古墳時代前期前葉における遺跡の造営とその盛行は、その中葉以降急激に衰退する。前期中葉以降古墳時代中期までの遺跡の発見例は、この富士根地区においてはまだない。

古墳時代後期になると木ノ行寺遺跡 (19) や中沢遺跡 (37) などの遺跡が造営される。木ノ行寺遺跡では、7世紀の井泉が発見されている。この段階の遺跡はそれほど広範囲の広がりを見せていないようであり、この2遺跡周辺に限られるようである。この集落遺跡に対して、後期の古墳として大室古墳 (2)、神祖山ノ神古墳 (15)、神祖2号墳 (14)、神祖3号墳 (13) などがややまとまりをもって点在している。それぞれが直接関連して古墳群を形成するとは地形的な制約から考え難いが、市内では数少ない古墳が今に残る地域であると言える。

奈良時代の律令期に入ると遺跡の動向は、盛行期を過ぎ小規模化するようである。権現遺跡や

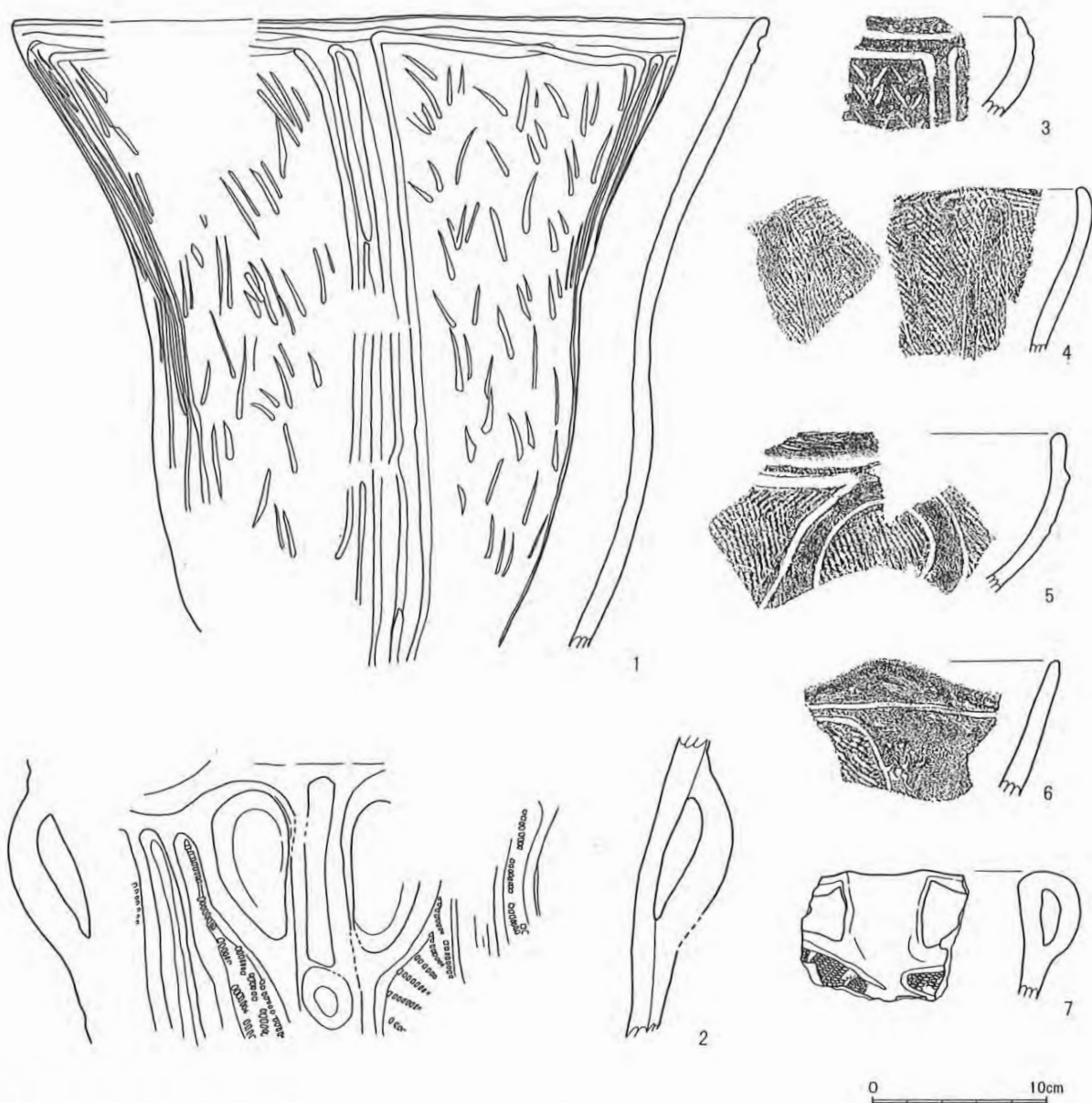


図5 大室遺跡採集土器実測図

石敷遺跡(34)に奈良時代前半の遺跡分布が見られ、大溝や掘立柱建物群、竪穴住居などが発見されている。ここに集落としてのまとまりを考えることもできるが、両者は同一の丘陵上に位置していない。富士根地区の遺跡群では、最も潤井川に近い南側にある遺跡でもある。これらに対して、弓沢川伝いでは上石敷遺跡(35)、峯石遺跡(6)などの奈良時代前半期の集落が調査されているが、いずれの遺跡も散在する竪穴住居址が発見されている程度でその規模は小さい。また、木ノ行寺遺跡(19)、中沢遺跡(37)ではこの段階の遺物が採集されている。古墳時代後期から継続する遺跡のようである。

大室遺跡(1)は、三ツ室遺跡(11)や神祖遺跡(12)、木ノ行寺遺跡(19)を合わせて面的な広がりを持つ遺跡群を構成している(図4)。ただし、遺跡の内容や時期については各地点で異なっており複雑な様相を示している。また、西側は大沢川を挟んで丸ヶ谷戸遺跡(5)や峯石遺跡(6)が立地している。この遺跡分布域では、かつて縄文土器が地元の方により採集され、市に寄贈されている(富士宮市教育委員会2003)。これは、274点に及ぶ土器が主体で、曾利式土器・加曾利E式土器と言った縄文時代中期後半の時期を中心としているもので、大型破片を主体とした良品である(図5)。採集品は長年に亘るもので、それぞれの具体的な出土地点は分からないが、住宅や所有する畑地が今回の調査地点の北側である点を踏まえると、それぞれを関連付けて考えられる資料であると言えるものである。

大室古墳(2)は、1988年と2001年の2度の確認調査で径9~10mを測る古墳時代後期の円墳

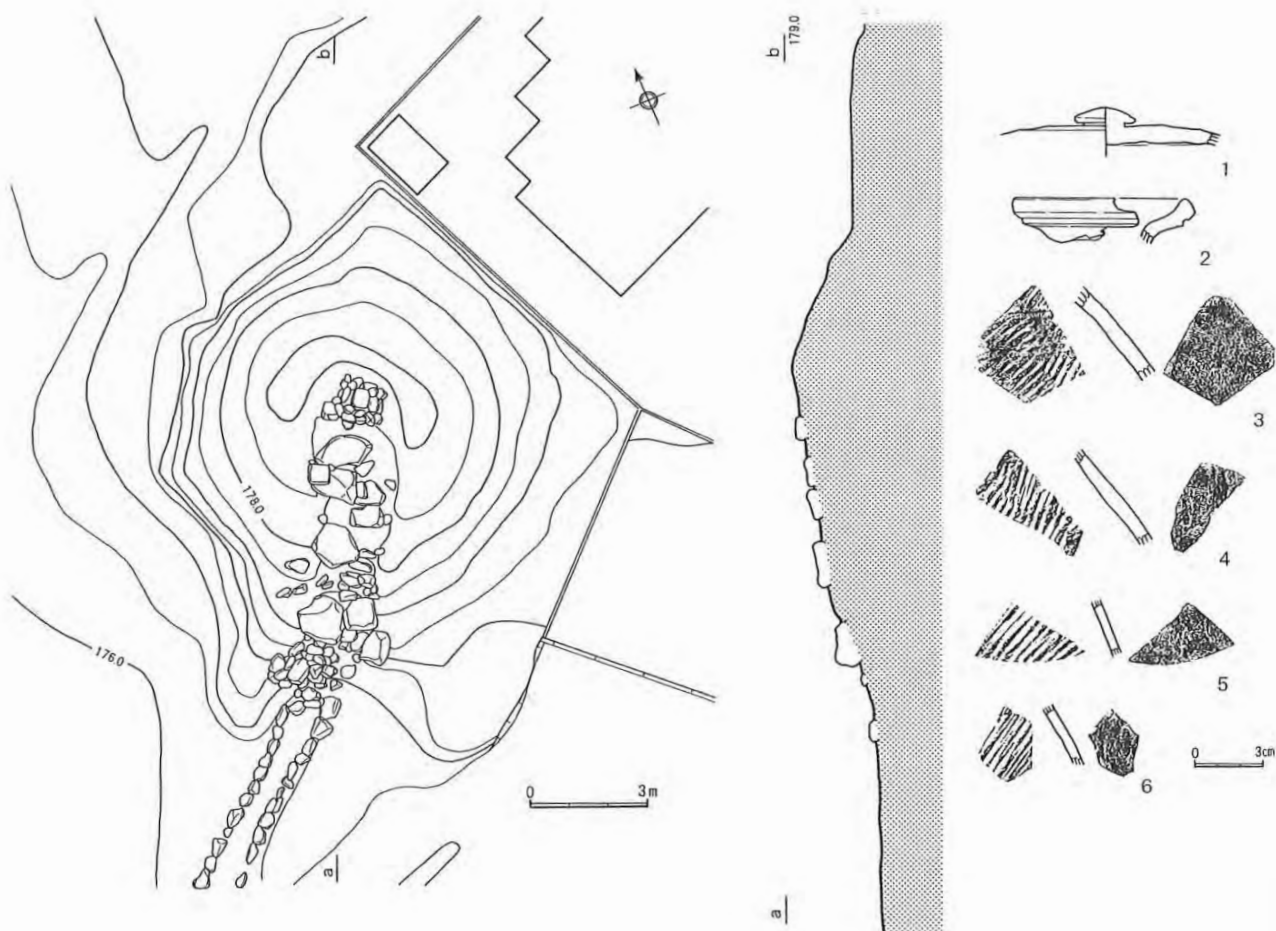


図6 大室古墳墳丘測量図・採集土器実測図

で、7世紀の築造が考えられる古墳であるとされている（図6）。現状の墳丘は高さ2.5mほどを測り、南西側に開口する石室が露呈している。石室は、墳頂部に祀られた「稲荷」への参道として再利用されており、大形の天井石を見ることができる。地元に住む野村昭光氏が採集された資料（図6）には、古墳時代後期と思われる須恵器甕破片である図6の2～5と奈良時代の須恵器蓋である図6の1が知られる。古墳の年代とそれに対する祭祀行為の時期を設定できる唯一の土器である。具体的な年代を検討するまでには至らないが、重要な資料であると考えられるものである（註）。

この古墳に関しては、1988年に実施した古墳の範囲確認トレンチなどの調査成果によって、周辺に別の古墳の存在が想定される。大室古墳周辺における群集墳の形成を考えなくてはならない状況にある。

このように、大室遺跡を含む遺跡群では大室古墳が所在する古墳群、近接する神祖古墳群の他に、古墳時代中期の初期群集墳の一部を残す滝戸古墳群と大室古墳と同時期の古墳群を形成する別所古墳群の4ヶ所を明確な例として富士宮市内に実在する群集墳を認定している（富士宮市教育委員会1993）。富士宮市内には前述のような黎明期の首長墓である丸ヶ谷戸古墳と古墳時代前期の塚本古墳の造営が見られるほかは、古墳時代で継続する首長墓としての大型墳は系統的に築かれてはいない。5世紀後半以降の小型墳の造営を通して在地の有力者の存在とその居住域が想定されるものである。しかし、現状では古墳時代後期の集落の発見例は比較的少ない。この大室古墳周辺では集落として木ノ行寺遺跡と中沢遺跡だけがその時期の遺跡として取り上げられるのである。それらが集落域と墓域との関係として認定できるかは今後の課題であるが、両者ともその分布する範囲があまり大きくない点では類似しているように思われるのである。

大室遺跡周辺では、古墳時代後期以降中世になるまで遺跡の形成は縮小する傾向にあるようで、峯石遺跡に奈良時代の前半に限定される小規模集落が形成される程度になる。この状況は、富士山信仰の普遍化に代表される中世鎌倉時代以降の山間地開発によって新たな展開を示すようになるのである。大室遺跡に近接する丸ヶ谷戸遺跡（5）では、中世の墓跡と道跡が発見されている。  
(渡井)

（註）

図6の土器は野村氏が所蔵している大室古墳採集の須恵器である。野村氏のご厚意により掲載させていただいた。

〈文献〉

佐野恵里 2003 「2. 寄贈資料（1）大室遺跡」『富士宮市の遺跡Ⅱ』富士宮市教育委員会  
富士宮市教育委員会 1993 『富士宮市の遺跡』

## 第Ⅱ章 調査区と層序

### 1. 調査区の設定

調査は、調査範囲を覆う任意の5 mグリッドを設定して行った。方眼は、西北隅から北東方向へはアルファベット、西北隅から南西方向へは算用数字を充てた。グリッド名は、西北隅の交点を使用した(図7)。

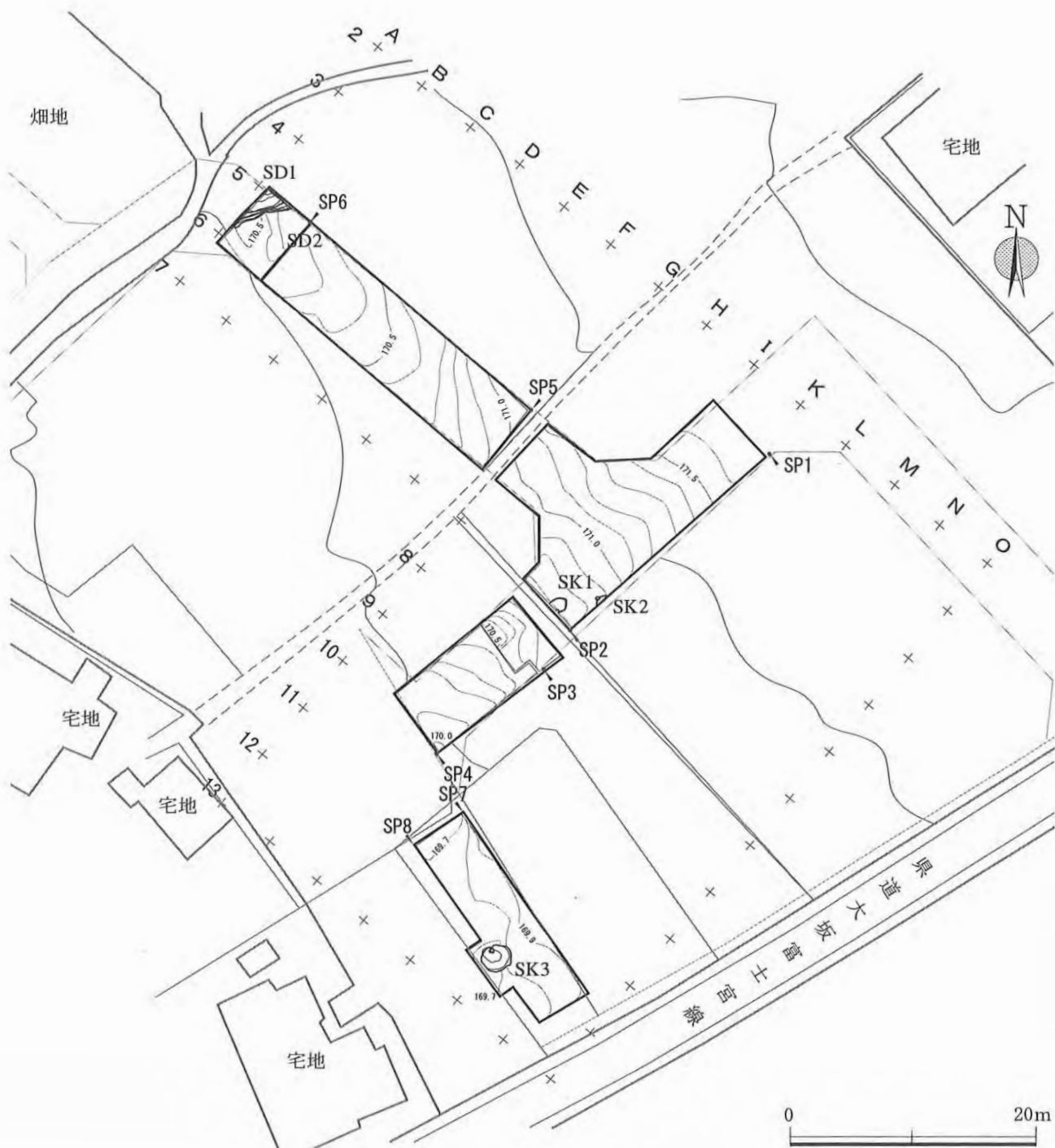


図7 調査区設定図

## 2. 層 序

今回の発掘調査で確認された層序は、現表土層より下へ、大沢ラピリ層—クロボク層—栗色土層—黒色土層（富士黒土層相当）—橙色土層—ローム質土層という状況を示す。

これは大室遺跡以外の富士根地域に所在する諸遺跡においても普遍的にみられる層序であるが、近現代の積極的な土地改造によって、本来の地形より現況の地形のほうが比較的平坦なものとなっている。そのため標高が高めの地点では、上位の層が削り取られ、標高の低い地点はより深い谷地形となる様相を示している。特に大沢ラピリ層に関しては畑地開墾の際にいわゆるマサ抜きが行われたため、クロボク層まで手が及んでいる箇所が調査区の大半を占めていた。

また、現況の土地区画において1.5mほどの高低差をもって一段低くなるJ10～M12グリッドに設定された南端の調査区では、昭和初期から中期ごろまで建物があったようでローム質土層まで削平が及んでいる箇所もあり、層の残存状態としては芳しくないものであった。

そのため、本遺跡で発掘調査を実施するに当たってその目安とするセクション壁を調査区の西北—東南方向に延長するSP1—SP2と北東—南西方向に延長するSP3—SP4・SP5—SP6を設定して土層の情報を得た。SP2のすぐ東側の先には水道管が敷設されているためセクション壁を延長することができないためにこの地点で区切り、SP4とSP5の間には畑地を区画する石段があり民家への雨水等の流入を防ぐためそれを撤去せずそのまま保護したために調査壁に途切れが生じている。

その層序の詳細は次のとおり示される（図8）。

### I 層）耕作土および攪乱

暗褐色土（Hue10YR系）：粗砂と破碎した小～中塊のスコリアブロックを7～10%含む。植物根が非常に目立ち、しまり・粘性ともに弱い。攪乱はイモ穴等の農作業によるもので質的に耕作土と変わらない。

### II 層）大沢ラピリ

II 1 層）黒褐色土（Hue7.5YR系）：極小～小粒の橙色スコリアと極小粒の白色粒子を濃密に（50%）含む。乾燥が進むと白色化し、セメント状に硬化する。しまりが強く、粘性はない。

II 2 層）黒褐色土（Hue7.5YR系）：ほとんど極小～小粒の橙色・赤色スコリアや粗砂から成る。II 1 層と比べて大きめ粒のスコリアが目立つ感じを受ける。しまり・粘性はともになく、表面は非常に脆く崩れやすい。

### III 層）クロボク

黒色土（Hue10YR系）：極小～小粒の橙色スコリアと粉状の白色粒子を5～10%含む。マサ抜きがされた箇所等では植物根が目立ち、比較的明るい色調の土が混在している。しまり・粘性ともやや強いが、脆弱な箇所もある。

### IV 層）栗色土

IV 1 層）暗褐色土（Hue10YR系）：小粒を中心とする橙色スコリアを3～5%含み、小粒の黒色粒子を1～2%含む。しまり・粘性ともに強い。今回の調査で土器が主体的に出土した層。IV 2 層との間でレンズ状に堆積する橙色スコリアを7～10%含んで比較的発色の明るい暗褐色土層をIV 1 a 層とした。

IV 2 層）黒褐色土（Hue10YR系）：極小～小粒の橙色スコリアを1～2%含む。光る粉状の白色粒子が上層よりも多くなるため、全体的に目立つ。極小粒の黒色粒子をわずかに含む。

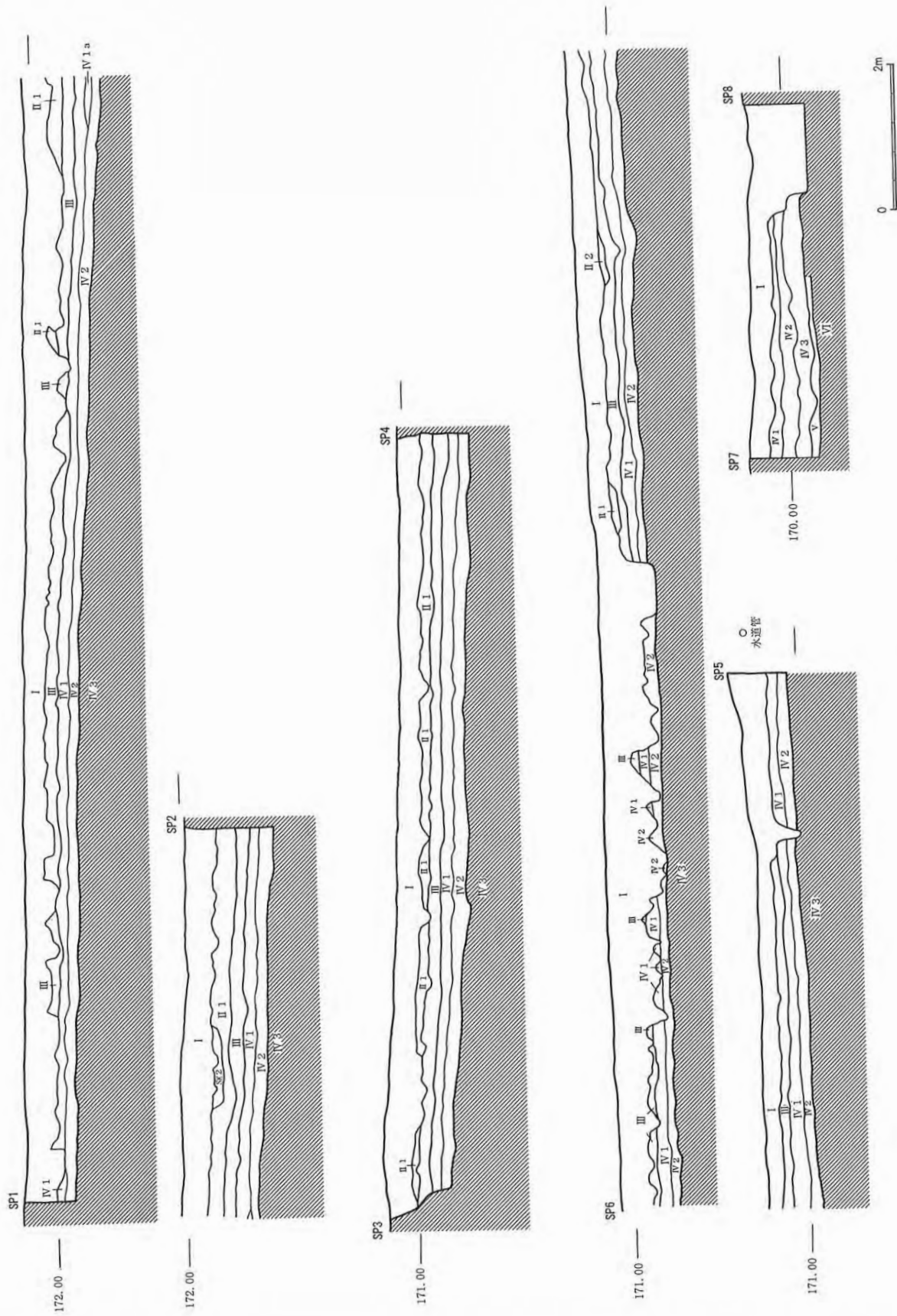


图8 調査区土層図



IV 3層) 暗褐色土 (Hue7.5YR系) : 中粒を主体とする橙色スコリアを2~3%含む。比較的明るい色調の土が集中する箇所があり、IV 1層と比べて赤味のある発色をしている。粒状の白色粒子と小粒の黒色粒子を1~2%含む。しまり・粘性ともに強い。確認調査においてこの層以下より遺物の出土が認められなかったため、SK 3の検出された調査区南端を除き、今回の調査ではこの層を以って掘削を止めている。(小野田)

SK 3が検出された調査区南端は、後世の削平が進み、II層の大沢ラピリ層・III層のクロボク層が確認されず、I層の表土層下にIV層が確認されている。そのため、SK 3検出作業に併行して、IV層の掘り下げを行い、さらに下層の調査を実施したところ、ローム漸移層(~富士黒土層相当層)を確認し、一部ローム層を検出した。

#### V層) ローム漸移層(~富士黒相当層)

褐色土 (Hue10YR4/4) : 極小~中粒の橙色スコリアを3~5%含む。粘性・しまり共にあり。

#### VI層) ローム層

明褐色土 (Hue10YR6/8) : 中粒の橙色スコリアを7%含む。粘性あり、しまり強。SK 3内では、下層では粘性が増し、色調も黄色も強くなる。小石~拳大の石を含むようになり、また非常に堅固で、古富士泥流層と考えられる。

包含層であるIII層~IV 3層は、調査区全体に比較的安定した層厚をもって堆積が確認されたが、遺物の出土は、確認調査時においても、F 6グリッドからI 5グリッド付近に分布する傾向があった。SK 3周辺では、IV層の堆積はあったものの、III層がすでに失われていることもあってか、遺物の出土は皆無であった。(佐野)

# 第三章 発掘調査の成果

## 1. 遺 構

### (1) 溝状遺構

#### a. SD 1 (図9)

調査区西端のA5グリッドに検出された。検出部分は東岸の一部分で、溝の中心部分まで達しておらず、遺構の大部分は調査区外に広がっているものと考えられる。検出範囲での長さは、グ

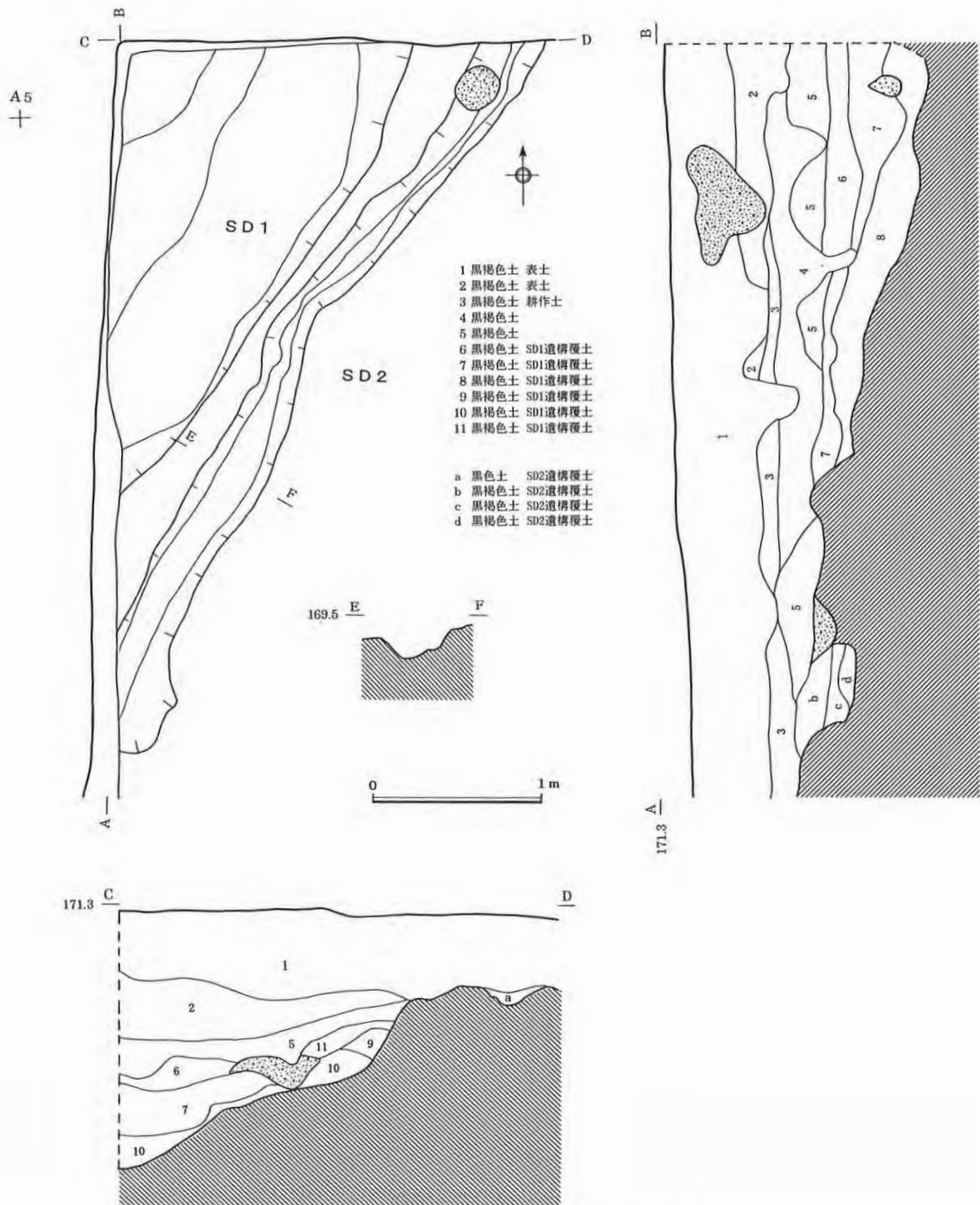


図9 SD1・2実測図

リッド5ライン方向では1.74m、グリッドAライン方向で2.64mであり、深さは0.78mである。

遺構壁面には段状の凹凸面が認められた。遺構は、大沢スコリア層から黄褐色ローム質土層まで掘り込んでいた。覆土は自然堆積を示し、各層とも土質に大きな差異はなく、比較的短期間に埋没したと考えられる。

SD 1は、地形の傾斜変換点に沿って構築され、自然地形の傾斜と同じく北東—南西方向に流下していると考えられる。

遺物は、近世陶磁器が出土した(図13—16・17)。覆土の土質からも、SD 1は、概期の遺構と考えられる。

#### b. SD 2 (図9)

SD 1の東に併走するような位置に検出された。SD 1と同じく、調査区外に広がりをもつと考えられる。検出範囲での長さは4.1m、幅は最大で0.37mで、深さは0.15cmである。遺構の平面形態は、幅に広狭があり整っていない。断面形態も場所によって差異があるが、凡そ逆台形を呈しているようであった。遺構は、標高が下るほど深くなっていた。遺物は皆無であり年代は不明である。(佐野)

## (2) 土 坑

#### a. SK 1・SK 2 (図10、図版1・2)

大沢ラピリ層での表面精査時にI 7坑周辺で円形状の土坑が小ピットや複数の条を為した犁痕のような後世の土地利用による痕跡に遺構を切られるかたちで2基確認されている。いずれも調査区壁際に位置するため、その全周を確認することが出来なかったが、SK 1は壁際において径54cmを測るやや楕円形を呈し、SK 2は壁際において径58cmを測り、円形を呈していると思われる。いずれも北から南へ緩やかに下る傾斜地に作られた遺構で、大沢ラピリに浅く掘り込まれており、SK 1が深さ4cm、SK 2が深さ7cm程度である。覆土はともに粗砂や礫を多く含んだ黒色土で、上層の耕作土や旧耕作土に用いられた暗褐色土や黒褐色土に比べ、土のしまりや粘性はやや強いといえる。また、橙色スコリアの小粒が若干みられる。基底部は平坦な面に仕上げられている。これらの土坑は、本遺跡と同じく富士根地域の大岩に所在する丸ヶ谷戸遺跡などでみられる円形土坑群と同類のものと思われる。今回の調査では、この遺構が確認できる大沢ラピリ層が残存する範囲が調査区中央南側周辺に限られていたため、円形土坑の数的なことや展開の仕方は不明であるが、その窪みの形状からして木桶等を設置するのに丁度良い大きさであり、この2基の土坑もそれぞれに対応して何らかの容器を埋設した施設を想定させるものである。遺物の出土はなかったが、時代は中近世を遡ることはないものと思われる。(小野田)

#### b. SK 3 (図11・12、図版2)

調査区の最下端、M12グリッド周辺で検出された。周辺は、北東—南西方向の緩やかな自然傾斜地である。調査当時、設定した調査区内ではほぼ半分が検出され、調査区外に及ぶと考えられたため、調査区を拡張して土坑全体の調査を行った。

SK 3付近から東の道路側へ向けては、近現代と考えられる攪乱が及んでいたため、SK 3自体も上部に削平を受けている部分が多かった。残存する形状は、平面形態はやや不整形の円形であり、断面形態は概ね遺構検出面から底面に向かって狭くなるが、遺構検出面よりオーバーハングして

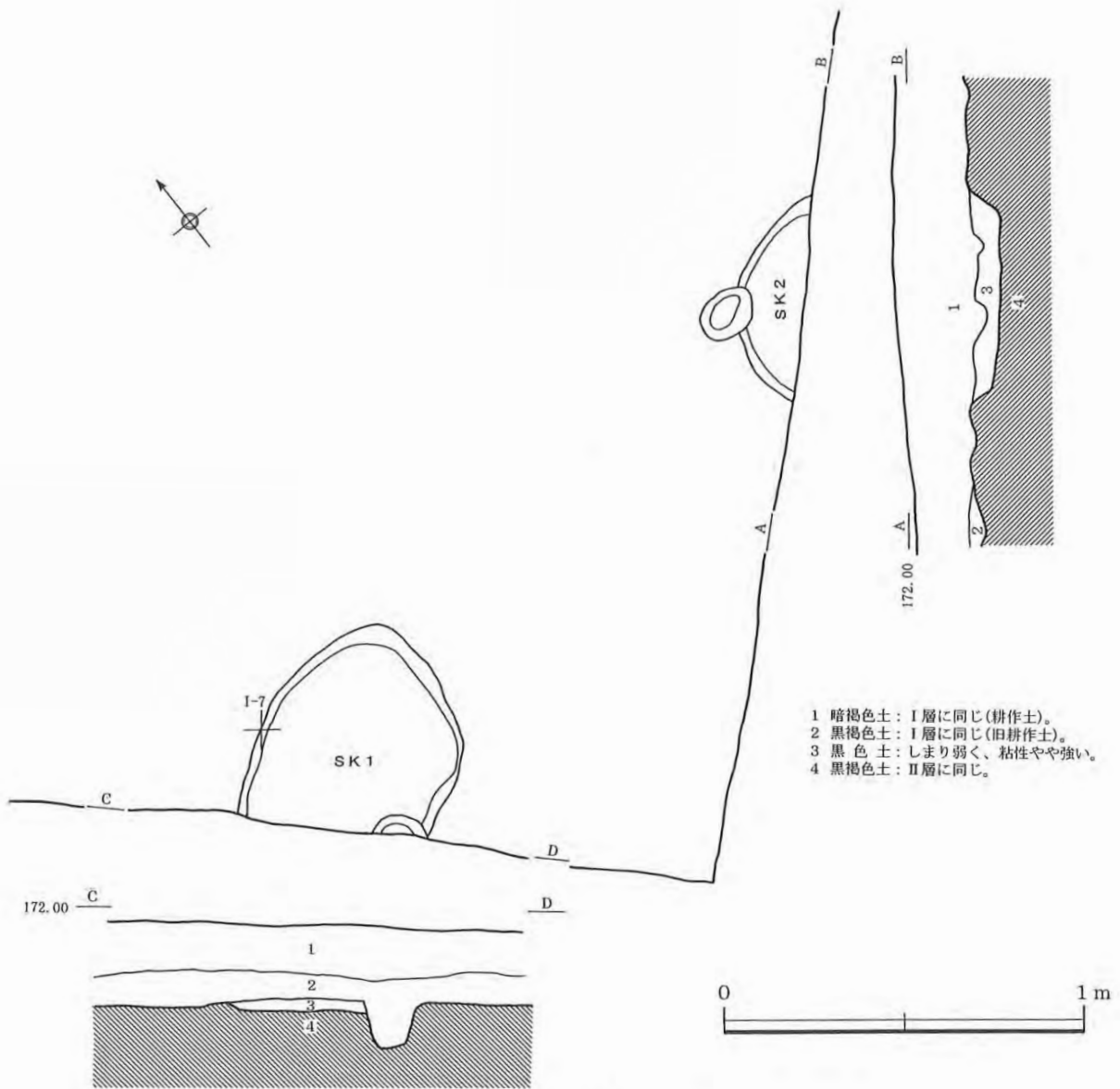


図10 SK1・2実測図

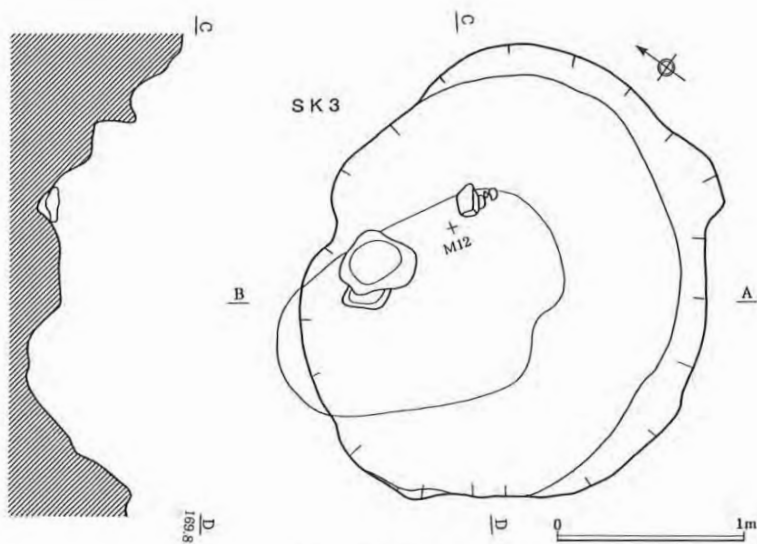


図11 SK3実測図

いる部分があった。規模は、2.15m (ABライン) × 2.31m (CDライン)、深さは最大で1.06mである。原地形は、北東—南西方向に向かって傾斜する傾向が認められたが、本遺構の底面の傾斜もまた、東が高く西方へ向かって傾斜している。

遺構覆土の下層 (10~14・16~22・24・25層) では、砂利や小石で構成される層が互層となっていた。遺構底面から互層となっている層までは、最大で66cm (17層→

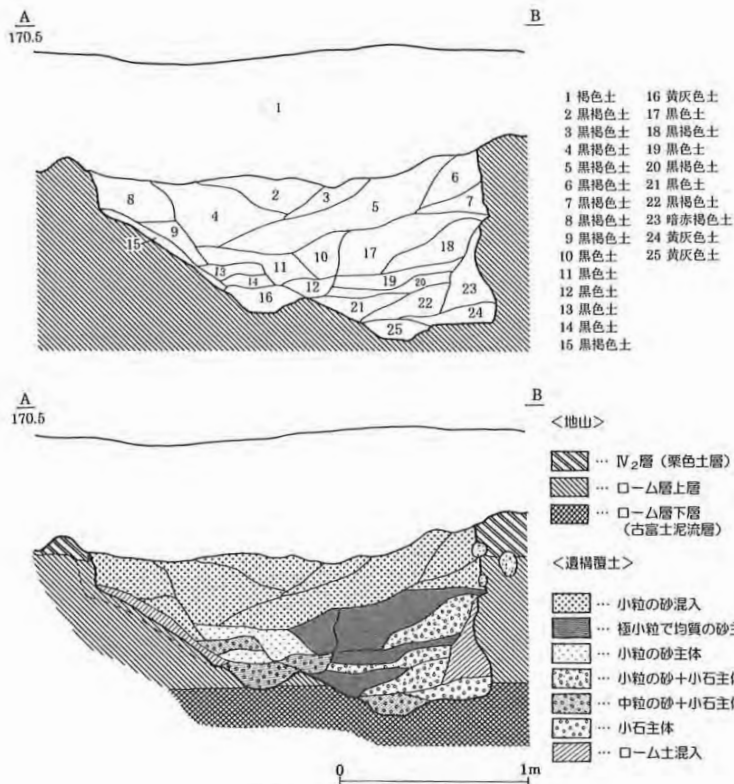


図12 SK3セクション図

また、主体となるのは砂利や小石であり、多くの溝状遺構や井戸で確認されている（東日本埋蔵文化財研究会1998）水成堆積層と考えられる。それに対して、上層（2～9層）は、レンズ状堆積を示しており、遺構埋没に伴う自然堆積土と考えられる。遺構壁面に形成された15層と23層は、ローム質土を含んでおり、遺構壁面の崩落土と考えられる。

縄文土器の磨滅した状態は、人為的作用というより自然作用によるものと考えられ、特に流水による研磨の可能性がある。調査地点周囲は、北東方向直線距離にして800m山側の出水<sup>いずりみず</sup>八幡宮境内と、北西方向下った上小泉八幡宮境内に、市指定保存湧水池となっている湧水地点があり、比較的水資源の豊富な地域である。富士山麓における湧水地は、古富士火山泥流（約10万～1万年前の富士山溶岩流）が不透水層であるため、透水層となっている新富士火山溶岩流（約1万年前～）に富士山麓の雨水や雪解け水がしみこんで、新富士火山溶岩流末端で地表に湧出したものと考えられている。本遺構は、前述のように、古富士火山泥流層まで掘り込んでおるので、湧水に関わる遺構である可能性がある。

〈参考文献〉

東日本埋蔵文化財研究会 1998 『治水・利水遺跡を考える—一人は水とどのようにつきあってきたか—』第7回東日本埋蔵文化財研究会

25層)の深さである。また、下層になるほど、小石主体となっていた。上層(2～9層)は、本地域の弥生～古墳時代の遺構覆土に類似する黒褐色土及び黒色土主体の砂質土であった。遺構は、栗色土層を掘り込こみ、底面は古富士泥流層まで達している。

遺構壁面及び底面は表面が非常に滑らかであったが、底面は形状に凹凸が著しかった。

遺物は、縄文土器、弥生土器、石鏃が出土した。土器は全て破片資料であり、縄文土器は、一様に器面全体が平滑に磨り減っていた(図14)。

遺構の土層堆積状況を見ると、下層(10～14・16～22・24・25層)はほぼ水平堆積の傾向にあり、ま

## 2. 遺物

### (1) 遺構内出土遺物

#### a. SD 1 出土遺物 (図13、図版3)

近世陶磁器の2点を図示した。1は、肥前の磁器碗で、染付によって矢羽状文が描かれている。18世紀後半のものである。2は瀬戸美濃の陶器皿で、高台底面を除き、灰釉がみられ、見込みには鉄絵による画花文が描かれている。18世紀後半のものである。

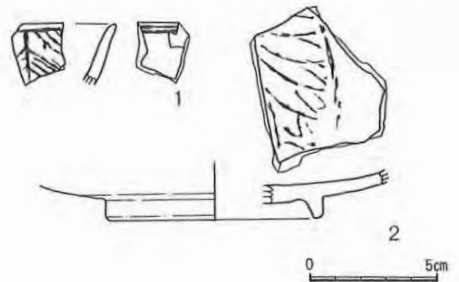


図13 SD 1 出土遺物

#### b. SK 3 出土遺物 (図14、図版3)

土器 (3~16) 縄文中期後半~後期前半の土器がほとんどと考えられ、多くが中期後半の土器であり、遺構外出土土器と同時期である。土器は、全て破片資料で、表面が

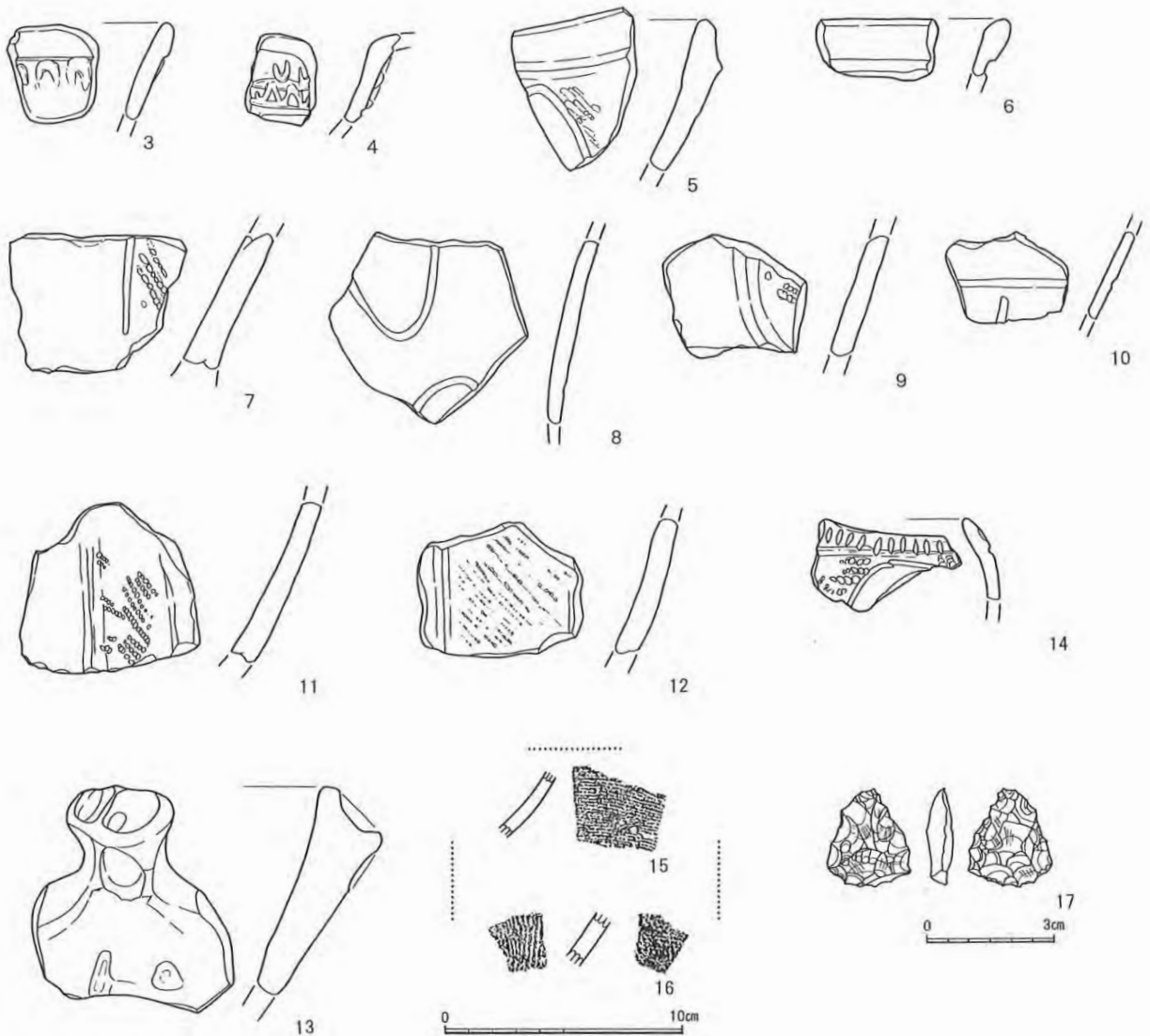


図14 SK 3 出土遺物

一様に摩滅している。一部を図示した。本地域では、縄文時代中期後半の土器は、曾利式土器が主であって、加曾利E式土器は従であるという土器様相が捉えられており、また曾利式土器後半には、両者の折衷型ともいえる判別しにくい土器も増加してくる（富士宮市教育委員会1997）ため、文様区画帯に縄文を用いているものについては、加曾利E式（系）土器とした。

3・4は、曾利式土器の深鉢形土器で、頸部に波状隆線がみられる。5～12は、区画内に縄文がみられ、加曾利E式（系）土器の深鉢形土器と考えられる。5・9・11・12は、文様区画が隆線でなされ、6～8・10は、沈線でなされている。3・4は、曾利1・2式といった曾利式土器前半、5～12は、縦位の磨消縄文帯を持つようになる加曾利E 3・4式土器後半（5～12）と考えられる。13は、口縁部に突起が付される堀之内式土器の深鉢形土器と考えられる。径が比較的狭く、口縁部が直立している。突起が上面から見ると豚鼻状になっている。堀之内I式土器と考えられる。14は、口縁部が内湾し、波状口縁となる深鉢形土器と考えられる。口縁部に沿って刻み目が施され、無文の沈線区画外に縄文が見られる。時期不明である。15・16は、弥生時代終末～古墳時代初頭の土器で、15は壺形土器、16は甕形土器である。概期の土器は2点のみの出土である。

石器（17） 石鏃1点のみである。石材は黒曜石である。剥離はやや雑で、刃部や基部の整形も十分でない。未製品かと考えられる。

## (2) 遺構外出土遺物

### a. 土器・土製品（図15—18～46、図版4）

土器（18～45） すべて遺構外出土遺物及び表採遺物である。図示可能なもの全てを図示した。

18は、胎土に繊維を多量に含み、器壁に条痕が見られる深鉢形土器胴部破片で、縄文時代早期後葉の条痕文系土器群である。

19～43は、縄文時代中期後半の曾利式土器および加曾利E式（系）土器の深鉢形土器である。19は、口縁部に横位文様帯がみられ、以下に渦巻状の磨消縄文帯がみられる。20～22は、口縁部が無文となり、以下に渦巻状の磨消縄文帯がみられる。23・24・29は、口縁部に横位の沈線と□区画の一部と思われる「形」の沈線がみられる。25・26は、口縁部横位の沈線下に縄文がみられるものである。27は口縁部に横位の沈線はなく、縄文がみられる。28・30は口縁部に横位の沈線がみられる。31にはわずかに連八文の沈線が観察できる。32～45は頸部及び胴部破片で、32～41は磨消縄文が、42は沈線内外に縄文がみられる。U字形区画が見られるものもある（35・36・39・41）。43は、曾利式土器の特徴となる連八文がみられるものである。これらの土器は、磨消縄文及び縄文を用いるものが多く（19～22・25～26、34～42）、加曾利E式（系）との関連が窺え、曾利式土器と考えられるものは31・43の2点である。19は、口縁部文様帯が残存しており、加曾利E 3式、22～31は、口縁部文様帯を喪失しており加曾利E 4式乃至曾利IV～V式と考えられる。胴部破片も、文様が簡素化したと考えられるもので占められ、両形式の後半期のものと考えられる。44・45は、縦位と横位に刷毛目状の沈線を施文する胴部破片で、他の土器よりやや丸みを帯びている。曾利式土器の範疇かとも思われるが、よくわからない。

土製品（46） 再利用土器片である。周縁は打ち欠いたままであり、平面形は方形に近い。

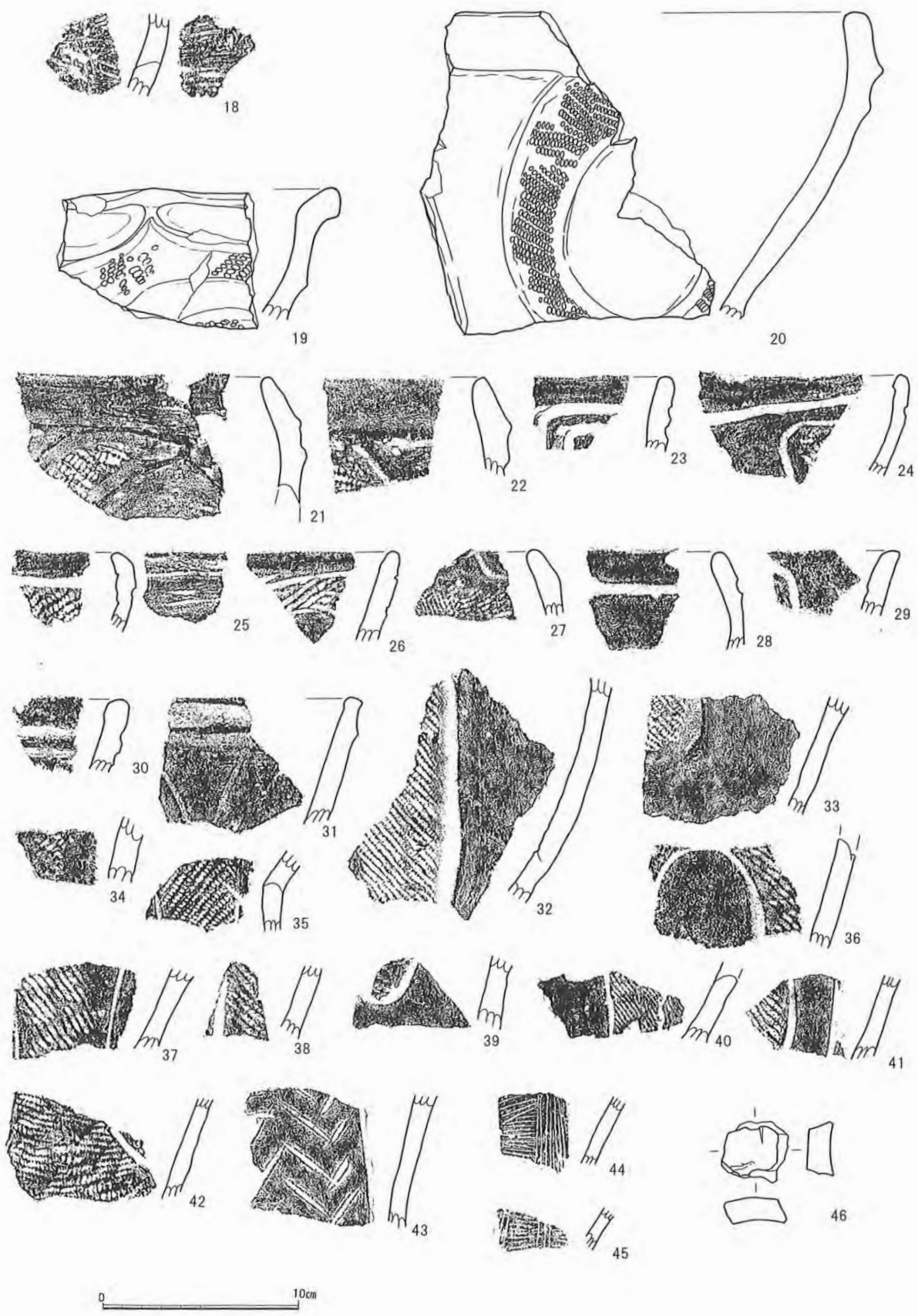


图15 遺構外出土遺物①



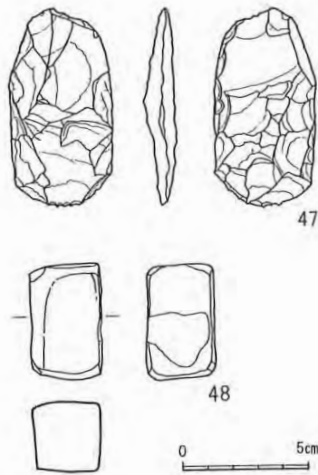


図16 遺構外出土遺物②

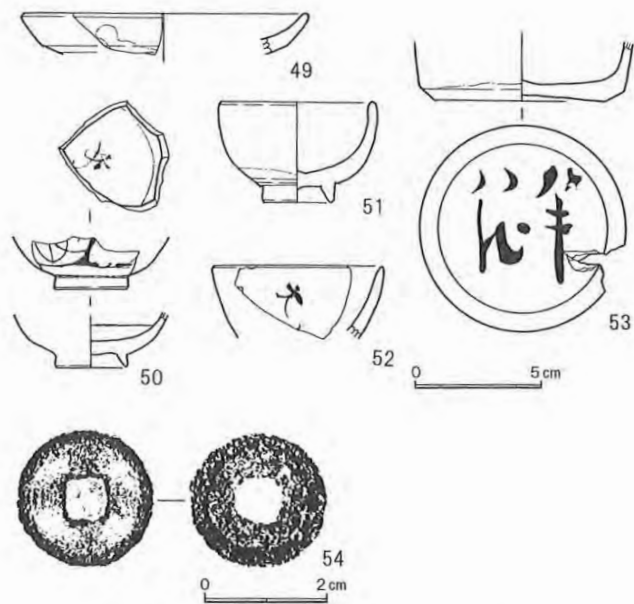


図17 確認調査トレンチ出土遺物

### b. 石器 (図16、図版3)

47は、短冊状打製石斧である。両側縁は直線状で、刃部は弧状である。左側縁を一部欠損している。剥離は石材によるためか、薄い剥離痕が確認できる。包含層中出土であり、縄文中期後半のものと考えられる。

48は、砥石である。全面を砥面としているが、正面がやや顕著な砥面となっている。平面は長方形、断面はほぼ正方形であるが、隅を使用しているため、隅丸形となっている。手持ち砥ぎかと考えられる。時期は不明である。

### (3) 確認調査トレンチ出土遺物 (図17)

事業対象地南西の確認調査トレンチ出土遺物である。49は、瀬戸美濃の陶器皿で、内面から口縁部にかけて灰釉がみられる。17世紀後半～18世紀初頭である。50は、肥前の染付磁器碗である。見込み文がある。18世紀後半である。51は、瀬戸美濃の陶器碗で、灰釉系の釉薬が掛けられているが、高台と底部は露胎している。18世紀後半である。52は、肥前の染付磁器碗である。18世紀後半である。53は、志戸呂の陶器瓶で、外面及び内面に鉄釉が掛けられている。底面に墨書があるが、判読はできない。18世紀後半である。

54は、銭貨で、銅銭の寛永通寶である。腐食が進んでいる。

(佐野)

#### 〈参考文献〉

富士宮市教育委員会 1997 『滝戸遺跡』

末木健 1981 「曾利式土器」『縄文土器の研究』4

財団法人かながわ考古学財団 2002 『かながわの考古学』研究紀要7

---

## 第IV章 ま と め

---

### 1. 発見された遺構

縄文時代の遺構としては、大形の土坑であるSK 3の発見が大きな成果として取り上げられる。また、明確な遺構は伴わないものの遺物包含層の確認も同様な成果として評価される。遺物の包含層は、今回の発掘調査面積に較べてそれほど多い遺物の量が認められる状況にはない。それは、発掘調査が遺跡の主体としての竪穴住居などで構成される居住域や土坑や配石などの墓域の中心部ではなく、あくまでも集落の縁辺部に対して行われたためであると言える。

発掘調査区の大半は緩やかに傾斜する丘陵上面にあたるが、その南端部においては徐々にそれが落ち込む様子が明らかとなっている。これは現状の景観に較べて当時の地形が起伏に富み、調査区南側の谷地形を指摘されるものであるが、調査区辺りを谷頭と丘陵端部の様子をここに見ることができる。地形は集落の範囲を規定しているようで、今回の調査区がひとつの境界となるものと考えられる。この調査成果を踏まえると、今回の調査対象地の北側に集落の中心があるものと想定されるのであり、図5に掲載した大室遺跡採集とされる土器類が大きく評価されるのである。また、この縄文時代の遺物包含層は、さらに北側にある大室古墳の辺りではその分布がはっきりしなくなることが、古墳に対する調査で明らかになっている。これらの状況から大室遺跡における縄文時代集落あるいは縄文時代の遺物包含層は、南北100m程度の広がりの中に納まることが分かる。

この集落域の縁辺部で発見されたSK 3は、覆土の堆積状況や出土土器などにより長い間、水の貯水が行われてきた施設と考えられるものである。そして、その底面が古富士火山集塊質泥流層の露呈する部分まで掘り窪められている点は、富士山の地下水（伏流水）が湧水として湧き上がる原理をうまく利用した人為的な取水施設（井泉）として捉えられるのである。

SK 3は丘陵が大きく谷地形となる谷頭部つまり丘陵斜面部に位置している。それは、丘陵上面に展開する集落に対して、その縁辺部にあることになるとともに傾斜地を選定することで比較的容易に古富士火山集塊質泥流層まで掘り窪められる立地環境を示すことになる。さらに、斜面地にあることが、冠水を避け流水を意図的に制御できる機能性を持つことにもなるのである。

人為的な掘削を行い人工的な湧水点を設けることを目的として構築されたSK 3は、直接竪穴住居などに付随しない点や丘陵平坦面から70mほどの距離を隔てていることなどから、縄文時代中期～後期における集落経営の中で共同して使用された施設であったと考えられるものである。調査区域内でそれに伴う石組み遺構や木組み遺構などの構造物は発見されていないため、堅果類などの植物質食料の加工や植物繊維の水さらし、木材の加工や保存などを行う「水場遺構」（佐々木2000）としての施設を考えるまでには至らない。水場遺構の多くが有機物の残存が期待される沖積低地で発見されている環境を考えると、直接的な関連を想定するのはなかなか難しい。ただし、土坑がその谷方向に排水あるいは導水機能を持つ溝を有し、その先に水場遺構としての構造物を伴う場合は、斜面地における一連の施設を考えなくてはならない。現状の限られた調査範囲における調査成果では、生活用水などの水の確保を主な目的に構築されたものとして一先ず捉えておくことにする。

このような井泉とした施設は、同じ弓沢川沿いにある木ノ行寺遺跡においても確認されている。

木ノ行寺遺跡の井泉は、今回の調査地点から800mほど南側の場所で発見されたもので、同一の傾斜地にあるものとして捉えられる。つまり、両者は同じ地下水脈を利用して人為的に作られた湧水池であると言えるものである。

木ノ行寺遺跡の井泉（図18）は、SK 3とは大きく時代を違えており、古墳時代後期7世紀代のものである。直接比較することはできないが、山間地における利水の跡としてここで紹介してみる。井泉は長径5.38m×短径3.70mを測る貯水部と幅1.10m、残存長2.93mを測る導水部からなり、自噴した地下水を貯水しながら給排水する施設として捉えられるものである。導水部の溝は、斜面の傾斜に沿うように丘陵下に本来続くものと考えられ、畑地や水田に対する給水機能を持つ農業施設と推定されている（富士宮市教育委員会1995）。

また、貯水部においては、附属する階段施設も確認されており、生活用水の確保が行われていたことも明らかとなっている。井泉は集落の展開する丘陵の縁辺部で発見されており、その北側には、同時期の竪穴住居跡2軒と竪穴遺構1棟が位置している。それぞれ関連を持つものであると想定される位置にある。

木ノ行寺遺跡の井泉は、大室遺跡のSK 3と同様の自然の作用を利用して人工的に湧水池を設けるものである。このような機能を持つ施設は、富士山の地下水脈をうまく利用する同一の原理のもと、縄文時代から古墳時代までその形態は、受け継がれていたものと言える。ただし、両者は生活用水を確保する点などの共通する部分以外に、農業経営に係る木ノ行寺遺跡の井泉とSK 3とで根本的に異なる用途を考えなくてはならない。また、木ノ行寺遺跡のように直接この施設を管理したと思われる竪穴住居などが近接する場合と大室遺跡のSK 3とではその景観を大きく違えている。集落の経営形態の違いは、時代の違いとして当然考えられるものであり、木ノ行寺遺跡においては、集落内で分業する施設管理の様子を反映した遺構分布を示していると言えるのである。

今回の調査では、山間地における人工的な取水施設を木ノ行寺遺跡に続きその2例目として発見したわけであるが、時代は縄文時代中期まで大きく遡ることになるものである。富士山麓などの山間地における縄文時代の集落経営に係る取水施設の例はまだないようであり、その発見は特筆される。ここに集落の造営に際して当時の人々が自然環境をうまく利用して利水のための湧水点を作り出している姿を思い描くことができるのである。SK 3のような施設は、この地域の特性を考えると、普遍的に存在するものと思われるものである。遺跡の領域として、集落域の縁辺部や沖積地あるいは谷間などに対するかつての開発を十分考慮しなければならないのである。

今回調査では、調査区の北側100mほどに位置する大室古墳に関連する古墳時代後期の古墳群の広がりを知る遺構は発見されていない。現状の畑地における耕作の影響を考えなくてはな

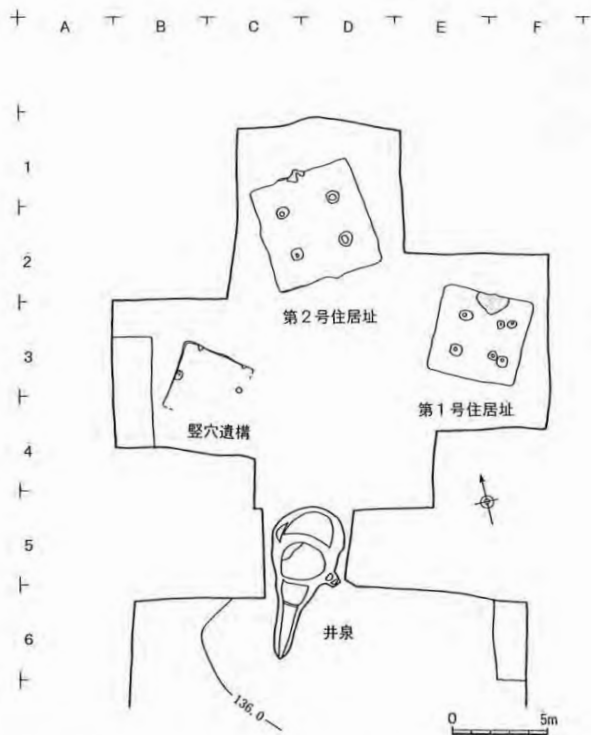


図18 木ノ行寺遺跡遺構分布図

らないが、当該期の遺構は元より遺物の分布も認められていない。

大室古墳は複数の古墳から構成される古墳群の中の一基であることが、古墳に対する確認調査で判明している。しかし、その分布範囲については、大室古墳以外が高塚として残存していないのでよく分かっていないのが現状である。今回の調査においてそれが認められない点から、南側に対する限界をある程度押さえることができるようになった。また、大室古墳の西側には、今回の発掘調査に伴う確認調査で明らかのように、開発事業の西側を縦断する大きな埋没谷が延びており、古墳の築造には相応しくない地形を示している。これらから古墳群の南側から東側に対して広がり判明したものと捉えられる。古墳群の北側から東側の範囲については、今後の調査に委ねられるものであるが、市指定史跡としての「大室古墳」の被葬者が持つ階層性やその具体的な性格を考える上で慎重な対応が必要になるものと思われる。

今回の調査では、これら成果以外にも江戸時代の土地開発に係る溝（堀）SD 1 や土坑なども確認しており、時代の複合する遺跡として、富士山麓に対する開発が時代ごとにその様相を変えながらも行われていた実態の一端を考古学的な調査で解明したものと評価されるのである。

## 2. おわりに

大室遺跡やその周辺は、遺跡の分布範囲が広く、遺物の採集が多い地域であったものの、遺跡に対する本格的な発掘調査の事例はほとんどなかった地域であった。今回の調査は、大室遺跡、三ツ室遺跡、神祖遺跡に対するはじめての発掘調査でもあった。この調査で判明した事実やかつての大室古墳に対する確認調査や神祖遺跡、三ツ室遺跡における確認調査などの成果を踏まえると、緩やかな傾斜地が続くこの地区において、遺跡の内容は各地点で大きな違いを示していることが分かる。木ノ行寺遺跡まで下がると古墳時代後期の集落を認めることができるものの神祖遺跡辺りでは弥生土器が主体的に採集されるなどの違いを見せているのである。そして、大室遺跡周辺では縄文時代集落の立地が明らかとなったわけである。

この大室遺跡一帯には、丸ヶ谷戸古墳や大室古墳、神祖山ノ神古墳などの在地有力者の墓が築かれおり、同一斜面地上に墓域と居住域とが併存している様子を指摘することができるようになっている。相互の直接的な関係が分かる集落遺跡の発見はないものの、潤井川まで続く一連の遺跡分布域の中で多様な性格の異なる遺跡の存在を予想させる。このように、今回の調査では、広範囲に連続しない遺跡分布を確認したことにより、各地点における遺跡の具体的な性格とその歴史的な環境の一部が判明したものと考えている。 (渡井)

### 《文献》

- 佐々木由香 2000 「縄文時代の「水場遺構」に関する基礎的研究」『古代』第108号  
富士宮市教育委員会 1995 『木ノ行寺遺跡』

表2 遺物観察表

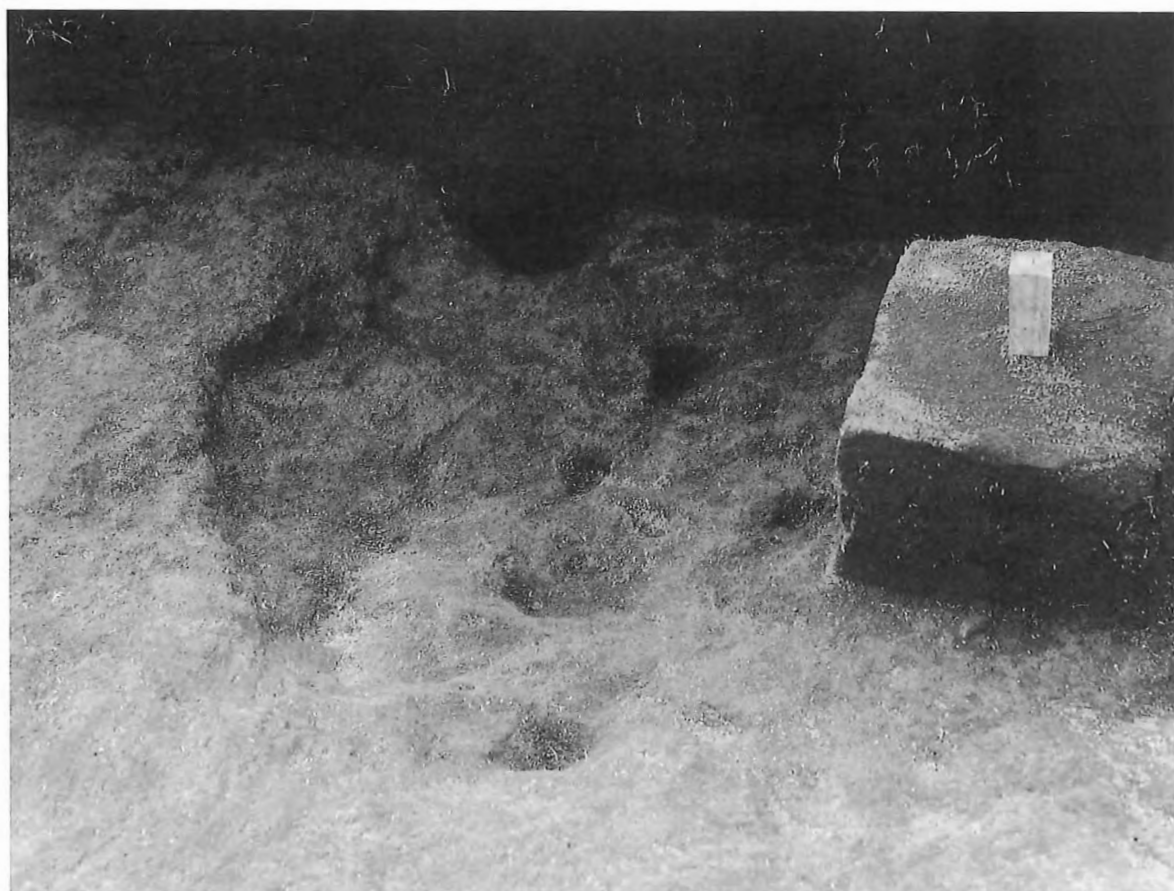
| 図-番号  | 出土区  | 種別   | 名称     | 部位    | 型式名・銘名    | 年代          | 産地   | 計測値                         | 文様          | 備考          |
|-------|------|------|--------|-------|-----------|-------------|------|-----------------------------|-------------|-------------|
| 13-1  | SD 1 | 磁器   | 碗      | 口縁部   |           | 18c後半       | 肥前   |                             | 染付・呉須絵      |             |
| 13-2  | SD 1 | 陶器   | 皿      | 底部    |           | 18c後半       | 瀬戸美濃 | 底径8.2cm                     | 灰釉・鉄絵       |             |
| 14-3  | SK 3 | 土器   | 深鉢形土器  | 頸部    | 曾利        | 曾利 I・II     |      | 厚0.8cm—0.7cm                | 波状隆線        |             |
| 14-4  | SK 3 | 土器   | 深鉢形土器  | 頸部    | 曾利        | 曾利 I・II     |      | 厚0.9cm                      | 波状隆線        |             |
| 14-5  | SK 3 | 土器   | 深鉢形土器  | 口縁部   | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 3・4   |      | 厚1.1cm                      | 沈線・縄文       |             |
| 14-6  | SK 3 | 土器   | 深鉢形土器  | 口縁部   | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 3・4   |      | 厚1.1cm—0.5cm                | 沈線          |             |
| 14-7  | SK 3 | 土器   | 深鉢形土器  | 胴部    | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 3・4   |      | 厚1.5cm                      | 沈線・縄文       |             |
| 14-8  | SK 3 | 土器   | 深鉢形土器  | 胴部    | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 3・4   |      | 厚0.7cm                      | 沈線・縄文?      |             |
| 14-9  | SK 3 | 土器   | 深鉢形土器  | 胴部    | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 3・4   |      | 厚1.0cm                      | 隆線・縄文       |             |
| 14-10 | SK 3 | 土器   | 深鉢形土器  | 胴部    | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 3・4   |      | 厚0.5cm                      | 沈線          |             |
| 14-11 | SK 3 | 土器   | 深鉢形土器  | 胴部    | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 3・4   |      | 厚1.1cm                      | 隆線・縄文LL     |             |
| 14-12 | SK 3 | 土器   | 深鉢形土器  | 胴部    | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 3・4   |      | 厚1.1cm                      | 隆線・縄文       |             |
| 14-13 | SK 3 | 土器   | 深鉢形土器  | 口縁部   | 堀之内       | 堀之内 I       |      | 厚3.3cm—1.1cm                | 隆帯?         | 把手          |
| 14-14 | SK 3 | 土器   | 深鉢形土器  | 口縁部   | ?         | ?           |      | 厚0.6cm                      | 沈線・縄文RL?、刻み |             |
| 14-15 | SK 3 | 土器   | 壺形土器   | 胴部    |           | 弥生終末~古墳初頭   |      | 厚0.6cm                      | 刷毛目         |             |
| 14-16 | SK 3 | 土器   | 甕形土器   | 胴部    |           | 弥生終末~古墳初頭   |      | 厚0.6cm                      | 刷毛目         |             |
| 14-17 | SK 3 | 石器   | 石鏃     |       |           |             |      | 長3.3cm—巾2.0cm—厚0.6cm、重2.2g  |             | 石材:黒曜石 未製品? |
| 15-18 | F6   | 土器   | 深鉢形土器  | 胴部    | 条痕文系土器    | 縄文早期後半      |      | 厚1.2cm                      | 条痕          |             |
| 15-19 | I4   | 土器   | 深鉢形土器  | 口縁部   | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 3     |      | 厚1.4cm—0.6cm                | 隆線・縄文LR     |             |
| 15-20 | I4   | 土器   | 深鉢形土器  | 口縁部   | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 4     |      | 厚1.8cm—1.4cm                | 隆線・磨消縄文LR   |             |
| 15-21 | I5   | 土器   | 深鉢形土器  | 口縁部   | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 4     |      |                             | 隆線・磨消縄文LR   |             |
| 15-22 | 包含層中 | 土器   | 深鉢形土器  | 口縁部   | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 4     |      | 厚1.6cm—0.8cm                | 隆線・磨消縄文LR   |             |
| 15-23 | 確認調査 | 土器   | 深鉢形土器  | 口縁部   | 曾利?       | 曾利 IV・V     |      | 厚1.2cm                      | 沈線・縄文       |             |
| 15-24 | 確認調査 | 土器   | 深鉢形土器  | 口縁部   | 加曾利 E(系)? | 加曾利 E 4     |      | 厚0.7cm                      | 沈線・縄文LR     |             |
| 15-25 | C5   | 土器   | 深鉢形土器  | 口縁部   | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 4     |      | 厚1.1cm                      | 沈線・縄文LR     |             |
| 15-26 | 包含層中 | 土器   | 深鉢形土器  | 口縁部   | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 4     |      | 厚1.1cm                      | 沈線・縄文RL     |             |
| 15-27 | 表採   | 土器   | 深鉢形土器  | 口縁部   | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 4     |      | 厚1.2cm—0.8cm                | 縄文R         |             |
| 15-28 | 確認調査 | 土器   | 深鉢形土器  | 口縁部   | 加曾利 E(系)? | 加曾利 E 4     |      | 厚1.1cm—0.7cm                | 沈線          |             |
| 15-29 | 表採   | 土器   | 深鉢形土器  | 口縁部   | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 4     |      | 厚1.1cm                      | 沈線          |             |
| 15-30 | 表採   | 土器   | 深鉢形土器  | 口縁部   | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 4     |      | 厚1.2cm                      | 沈線          |             |
| 15-31 | 表採   | 土器   | 深鉢形土器  | 口縁部   | 曾利        | 曾利 IV・V     |      | 厚1.1cm                      | 沈線・連八文      |             |
| 15-32 | I5   | 土器   | 深鉢形土器  | 胴部    | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 4     |      | 厚1.1cm                      | 沈線・縄文LR     |             |
| 15-33 | I5   | 土器   | 深鉢形土器  | 胴部    | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 4     |      | 厚0.9cm                      | 沈線・縄文LR     |             |
| 15-34 | 包含層中 | 土器   | 深鉢形土器  | 胴部    | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 4     |      | 厚1.3cm                      | 隆線・縄文LR     |             |
| 15-35 | 表採   | 土器   | 深鉢形土器  | 頸部    | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 4     |      | 厚1.1cm                      | 沈線・縄文LR     |             |
| 15-36 | 確認調査 | 土器   | 深鉢形土器  | 胴部    | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 4     |      | 厚1.1cm                      | 沈線・縄文R?     |             |
| 15-37 | 確認調査 | 土器   | 深鉢形土器  | 胴部    | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 4     |      | 厚1.1cm                      | 沈線・縄文R?     |             |
| 15-38 | 確認調査 | 土器   | 深鉢形土器  | 胴部    | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 4     |      | 厚1.1cm                      | 沈線・縄文LR     |             |
| 15-39 | 表採   | 土器   | 深鉢形土器  | 胴部    | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 4     |      | 厚1.2cm                      | 沈線・縄文LR?    |             |
| 15-40 | 表採   | 土器   | 深鉢形土器  | 胴部    | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 4     |      | 厚1.1cm                      | 沈線・縄文RL     |             |
| 15-41 | 確認調査 | 土器   | 深鉢形土器  | 胴部    | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 4     |      | 厚0.9cm                      | 沈線・縄文LR     |             |
| 15-42 | B5   | 土器   | 深鉢形土器  | 胴部    | 加曾利 E(系)  | 加曾利 E 4     |      | 厚0.9cm                      | 沈線・縄文LR     |             |
| 15-43 | 確認調査 | 土器   | 深鉢形土器  | 胴部    | 曾利        | 曾利 V        |      | 厚0.9cm                      | 沈線・連八文      |             |
| 15-44 | 確認調査 | 土器   | 深鉢形土器  | 胴部    | ?         | ?           |      | 厚0.7cm                      | 条線          |             |
| 15-45 | 確認調査 | 土器   | 深鉢形土器  | 胴部    | ?         | ?           |      | 厚0.6cm                      | 条線          |             |
| 15-46 | 表採   | 土製品  | 再利用土器片 | 胴部    | —         | —           |      | 縦2.8cm—横3.2cm—厚1.2cm、重14.0g | 無文          |             |
| 16-47 | H6   | 石器   | 打製石斧   |       |           |             |      | 長7.8cm—巾5.0cm—厚2.2cm、重44.0g |             | 石材:頁岩       |
| 16-48 | 表採   | 石器   | 砥石     |       |           |             |      | 長4.5cm—巾2.8cm—厚2.8cm、重62.1g |             | 石材:綠色凝灰岩    |
| 17-49 | 確認調査 | 陶器   | 皿      | 口縁部   |           | 17c後半~18c初頭 | 瀬戸美濃 | 口径(11.3cm)                  | 灰釉          |             |
| 17-50 | 確認調査 | 磁器   | 碗      | 底部    |           | 18c後半       | 肥前   | 底径(2.8cm)                   | 染付・呉須絵      |             |
| 17-51 | 確認調査 | 陶器   | 碗      | 口縁~底部 |           | 18c後半       | 瀬戸美濃 | 口径6.0cm—底径2.7cm—器高4.0cm     | 灰釉          |             |
| 17-52 | 確認調査 | 磁器   | 碗      | 口縁部   |           | 18c後半       | 肥前   | 口径(6.6cm)                   | 染付・呉須絵      |             |
| 17-53 | 確認調査 | 陶器   | 瓶      | 底部    |           | 18c後半       | 志戸呂  | 底径6.8cm                     | 鉄釉          | 墨書          |
| 17-54 | 確認調査 | 金属製品 | 銭貨     |       | 寛永通寶      | 近世          | 日本   | 外径2.08cm—穿孔径0.46cm—重1.8g    |             | 銅銭          |

# 写 真 图 版

図版 1



A. 調査区全景



B. SK 1



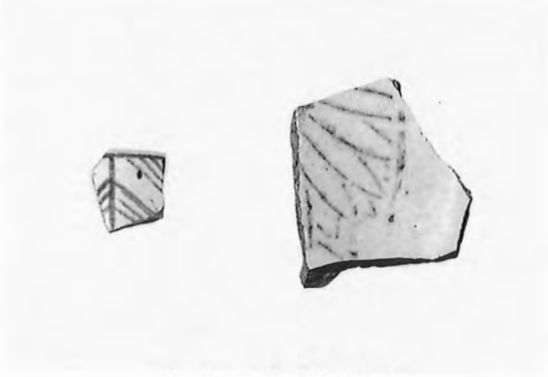
A. SK2



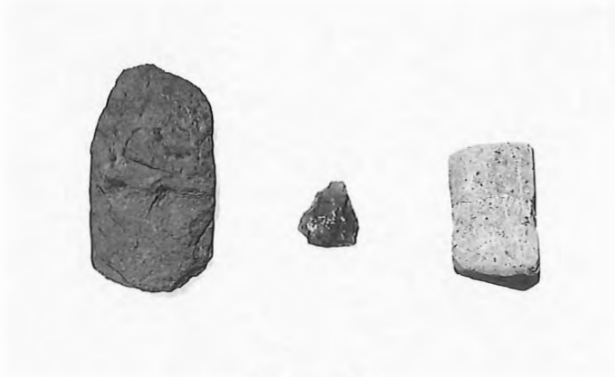
B. SK3



图版 3



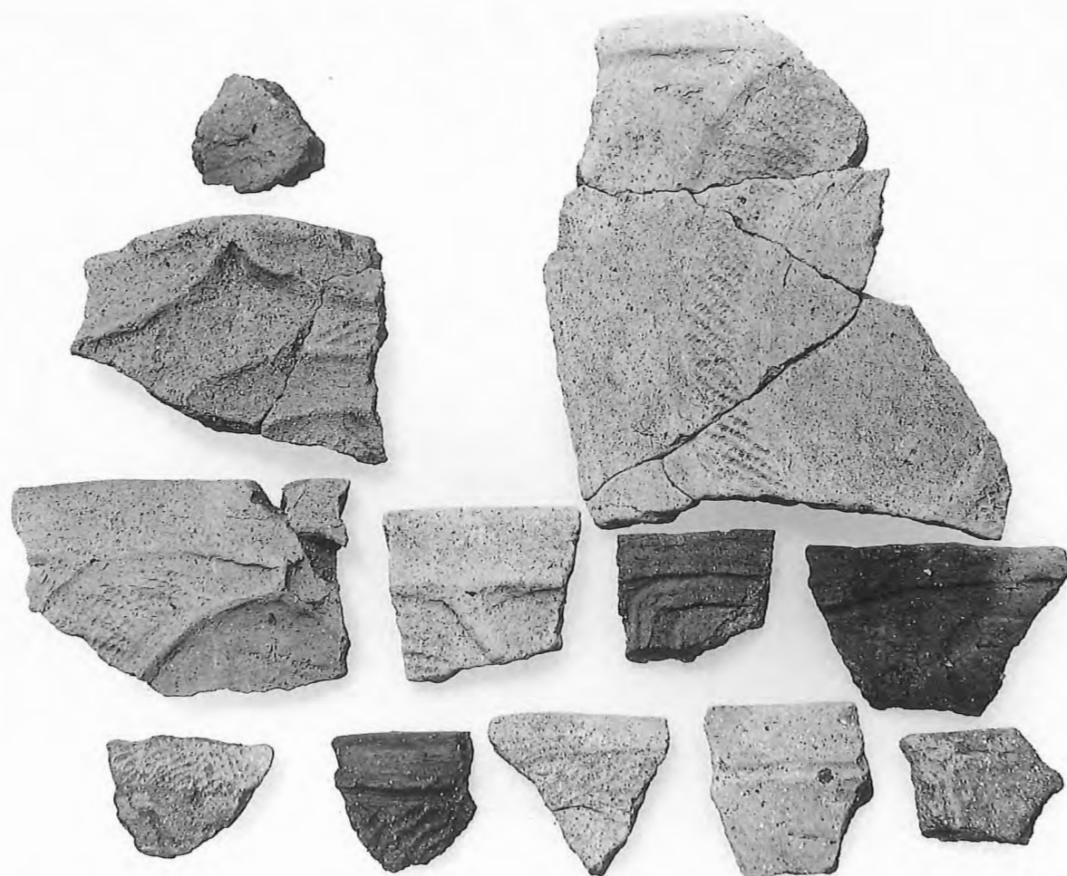
A. SD1 出土陶磁器



B. 石 器



C. SK3 出土遺物



A. 遺構外出土遺物①



B. 遺構外出土遺物②

# 報 告 書 抄 録

| ふりがな            | おおむろいせき   |       |      |                   |                    |                           |                       |            |
|-----------------|---|-------|------|-------------------|--------------------|---------------------------|-----------------------|------------|
| 書名              | 大室遺跡  |       |      |                   |                    |                           |                       |            |
| 副書名             | 富士総合開発観光株式会社宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書   |       |      |                   |                    |                           |                       |            |
| 巻次              |   |       |      |                   |                    |                           |                       |            |
| シリーズ名           | 富士宮市文化財調査報告書  |       |      |                   |                    |                           |                       |            |
| シリーズ番号          | 第35集  |       |      |                   |                    |                           |                       |            |
| 編著者名            | 渡井英誉、佐野恵里、小野田晶  |       |      |                   |                    |                           |                       |            |
| 編集機関            | 富士宮市教育委員会   |       |      |                   |                    |                           |                       |            |
| 所在地             | 〒418-8601 静岡県富士宮市弓沢町150番地<br>TEL 0544-22-1111(代)<br>mail : e-bunka@city.fujinomiya.ne.jp(文化課) |       |      |                   |                    |                           |                       |            |
| 発行年月日           | 西暦2005年6月30日  |       |      |                   |                    |                           |                       |            |
| 所収遺跡            | 所在地   | コード   |      | 北緯                | 東経                 | 調査期間                      | 調査面積<br>(㎡)           | 調査原因       |
|                 |   | 市町村   | 遺跡番号 |                   |                    |                           |                       |            |
| おおむろいせき<br>大室遺跡 | ふじのみやし<br>富士宮市<br>こいづみ<br>小泉<br>1453-1<br>他   | 22207 | 市20  | 35°<br>13'<br>51" | 138°<br>37'<br>58" | 20041213<br>}<br>20050114 | 約515㎡                 | 宅地造成工<br>事 |
|                 |   |       | 県91  |                   |                    |                           |                       |            |
| 所収遺跡名           | 種別  | 主な時代  |      | 主な遺構              | 主な遺物               |                           | 特記事項                  |            |
| 大室遺跡            | 散布地   | 縄文    |      | 土坑                | 縄文土器（早期、中期後半～後期前半） |                           | 縄文時代土坑は、湧水に関わる遺構の可能性。 |            |
|                 |   | 近世    |      |                   | 溝状遺構               | 石器（石鏃、打製石斧）               |                       |            |
|                 |   |       |      | 土坑                | 陶磁器                |                           |                       |            |
|                 |   |       |      | 土坑                | なし                 |                           |                       |            |

富士宮市文化財調査報告書第35集

## 大室遺跡

—富士総合開発観光株式会社宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成17年6月30日

編集 富士宮市教育委員会

発行 富士宮市教育委員会

〒418-8601

静岡県富士宮市弓沢町150番地

(0544) 22-1111(代)

印刷 みどり美術印刷株式会社

〒410-0058

沼津市沼北町2丁目16番19号

(055) 921-1839